

久慈市埋蔵文化財報告書 第5集

# 大芦遺跡発掘調査報告書

Report of Excavation at OHASHI Site, Kuji, Iwate Pre.

(市道大芦線道路災害復旧工事関連発掘調査)



1985

## 岩手県久慈市教育委員会

The Board of Education in Kuji, Iwate Pre.

久慈市埋蔵文化財報告書 第5集

# 大芦遺跡発掘調査報告書

Report of Excavation at OHASHI Site, Kuji, Iwate Pre.

(市道大芦線道路災害復旧工事関連発掘調査)

1985

## 岩手県久慈市教育委員会

The Board of Education in Kuji, Iwate Pre.

## 序

私たちの住む久慈市には、先人が残した集落跡や館跡など古くから数多くの遺跡の所在が知られております。

これらの遺跡は、数千年前の縄文時代から中近世までの長い時の流れを知る上で貴重な財産であり、かけがえのない文化財であります。

しかし近年、道路網の整備や、宅地造成など地域社会発展のための開発が進むなかで、文化財という貴重な財産は、日に日に失われつつあることも否めない事実であります。

私たちはこのような遺跡を、正しく理解をし、後世に残していく責務があるものと考えます。

本報告書は、大雨によって破壊された市道の災害復旧工事に伴い、昭和五十九年度に緊急に発掘調査した結果をとりまとめたものであります。

調査にあたっては、新田康夫先生、斎藤邦雄先生をはじめ、部落の方々のご協力を賜り、心から謝意を表するとともに、本報告書が郷土理解のため多くの方々に末長く活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となることを念願する次第であります。

昭和60年3月

久慈市教育委員会

教育長 横澤田 喜代治

## 例　　言

1. 本書は、岩手県久慈市夏井町字大芦第21地割に所在する大芦（おおあし）遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、市道大芦線災害復旧工事に伴うものであり、久慈市教育委員会（教育長 横澤田喜代治）が主体となり昭和59年8月1日から同年8月11日まで実施したものである。
3. 調査地は道路法面上であり、その面積は約120m<sup>2</sup>である。
4. 調査は次のような編成で行った。

調査担当者　面代 民義（久慈市教育委員会事務局社会教育課文化係 主事）

調査員　佐々木和久（久慈市文化財保護調査委員）

斎藤 邦雄（野田立野田小学校教諭）

新田 康夫（久慈市立久慈中学校教諭）

発掘協力者　（野外） 木村 正・箱石忠志・久慈中学校化学クラブ12名

（室内） 間 諭志・関上愛子・中沢淑子・下川原節子

調査事務局　総括 久慈市教育委員会事務局　社会教育課長 大澤 義昭

庶務　　〃　　文化 係長 岩泉 敏明

調査協力機関　市建設部 土木課

なお、報告書作成にあたっては、図版の作成・編集等について千葉啓蔵氏の協力を得た。

5. 実測図・撮影図の縮尺は、実測図が1%と1%で撮影図が1%であり、図下にスケールを付した。

6. 石質鑑定は、新田康夫氏にお願いした。

7. 調査期間中ならびに執筆にあたり、次の方々より御指導・御援助を頂いた。記して感謝の意を表す。

小笠原武氏（久慈市文化財保護調査委員） 相原康二・遠藤勝博両氏（岩手県教育委員会文化課）

## 目 次

序	
例 言	
I 調査に至る経過	3
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の概要	6
第1節 調査の方法と経過	6
第2節 土層	7
IV 遺物	9
第1節 土器	9
第2節 土製品	55
第3節 石器	62
第4節 石製品	75
V まとめ	77
引用・参考文献	78

## 図 版 目 次

第1図 大芦遺跡位置図	1	第22図 土器拓影図(6)	40
第2図 遺跡付近の地形図	2	第23図 "	(7) 41
第3図 発掘調査区図	4	第24図 "	(8) 42
第4図 発掘調査区土層観察図	5	第25図 "	(9) 43
第5図 土器実測図(1)	23	第26図 "	(10) 44
第6図 " (2)	24	第27図 "	(11) 45
第7図 " (3)	25	第28図 "	(12) 46
第8図 " (4)	26	第29図 "	(13) 47
第9図 " (5)	27	第30図 "	(14) 48
第10図 " (6)	28	第31図 "	(15) 49
第11図 " (7)	29	第32図 "	(16) 50
第12図 " (8)	30	第33図 "	(17) 51
第13図 " (9)	31	第34図 "	(18) 52
第14図 " (10)	32	第35図 "	(19) 53
第15図 " (11)	33	第36図 "	(20) 54
第16図 " (12)	34	第37図 土製品実測図(1)	57
第17図 土器拓影図(1)	35	第38図 石器実測図(1)	65
第18図 " (2)	36	第39図 "	(2) 66
第19図 " (3)	37	第40図 "	(3) 67
第20図 " (4)	38	第41図 "	(4) 68
第21図 " (5)	39	第42図 "	(5) 69

第43図 石器実測図（6）	70	第46図 石器実測図（9）	73
第44図 “ (7) ”	71	第47図 “ (10) ”	74
第45図 “ (8) ”	72	第48図 石製品実測図（1）	76

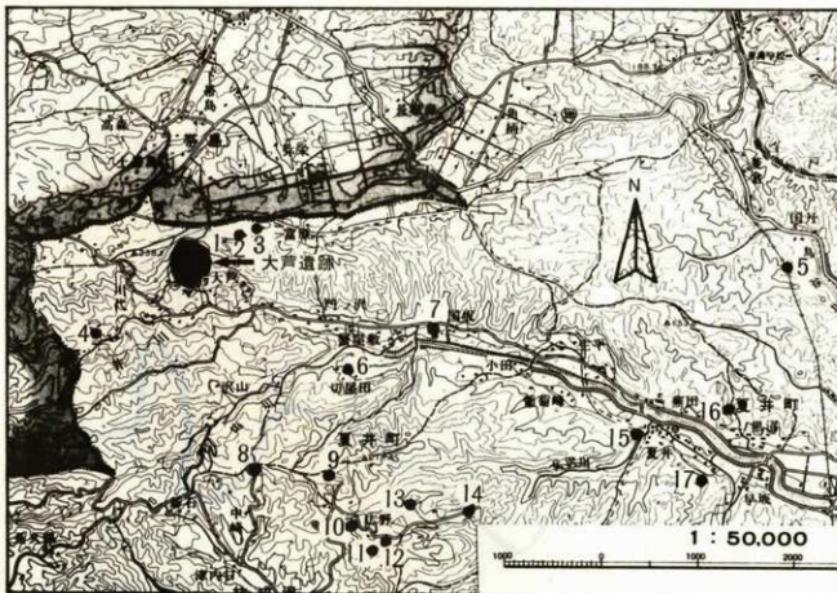
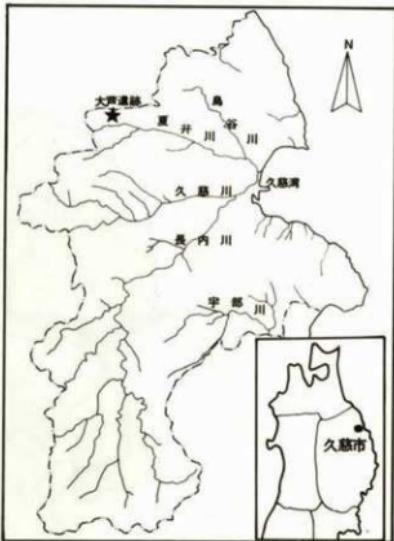
### 付 表 目 次

第1表 実測土器一覧表	58
第2表 土製品一覧表	61
第3表 石器一覧表	64
第4表 石製品一覧表	75

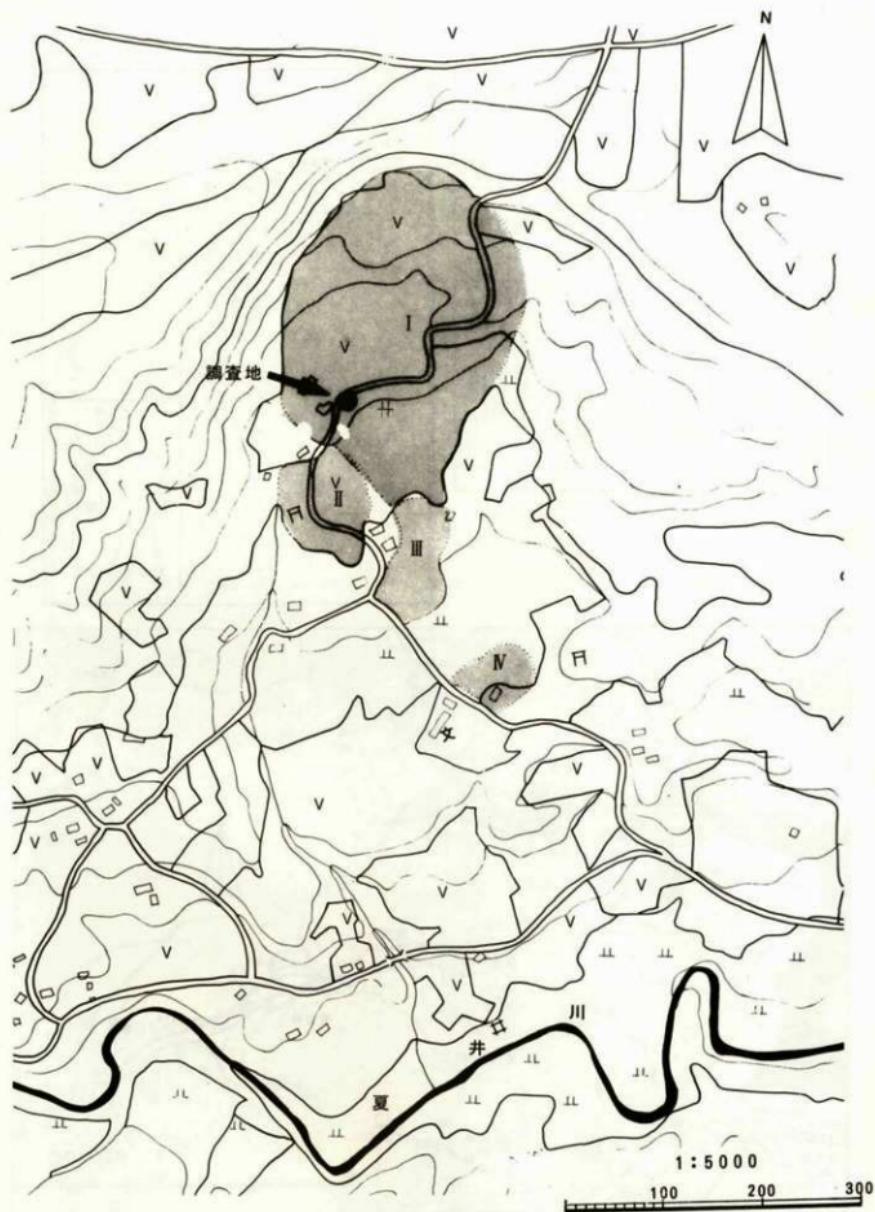
### 写 真 図 版 目 次

図版1 大芦遺跡近景	79
図版2 作業風景・土層堆積状況	80
図版3 遺物出土状況（1）	81
図版4 “ (2) ”	82
図版5 参考資料 調査以前の出土遺物	83

番号	遺跡名	種別	時代
1	大芦集落	村落	彌文(後・晚期)
2	富原I	"	" ("")
3	" II	"	"
4	川代	"	"
5	鳥谷館	城館跡	中～近世
6	切屋田集落	村落	彌文(前～晚期)
7	国坂	"	"
8	中崎	散布地	"
9	広野II	"	" (前・後期)
10	" III	"	"
11	" IV	"	"
12	" V	"	"
13	" VI	集落	" (前・後・晚期)
14	" I	散布地	"・弥生・古代
15	夏井館	城館跡	中～近世
16	大久保館	"	"
17	館ノ平館	"	"



第1図 大芦遺跡位置図



第2図 大芦遺跡付近地形図

## I 調査に至る経過

大芦遺跡は、戦前から土器・石器の出る所として付近の人々に知られており、昭和47年12月の岩手県沿岸地区遺跡分布調査の際縄文時代後・晚期の集落跡として確認された遺跡である。岩手県遺跡基本図における遺跡コード番号は、JF18-0137となっている。昭和49年には、久慈市教育委員会により埋蔵文化財包蔵地を周知する標柱が設置されている。

昭和58年末、市建設部土木課より市教委に対し市道大芦線道路災害復旧工事計画の照会がなされた。工事内容は、昭和57年5月20日の二ツ玉低気圧に伴う大雨による路肩損壊を要因とする道路法面補強工事である。市教委で直ちに現地立ち会い調査を行った結果、工事予定地の道路法面には多量の土器片が表出していることが確認された。これは、道路南側の畠地が開田工事により掘削され、道路法面が遺物包含層の断面となり降雨等により遺物が露出しているためであることが判明した。この調査結果に基づき協議を重ねたところ、①工事は道路法面を掘削せずに現地表面と腰壁との間に砂利等を充填するなどできるだけ現状を変更しない方法を取る。②調査は工事のための測量終了後に行う。③調査は道路法面上の遺物取り上げと遺物包含層の観察及び遺構の有無の確認を目的とする。④遺構が確認された場合は調査期間の延長もあり得る。その場合の対応については相方で改めて協議する。ということことで相方の合意を得た。

調査は、昭和59年8月1日から同年8月11日まで実施し、遺構の存在は認められず遺物包含層であることが確認された。調査終了後市教委立ち会いの下で工事が実施され、昭和59年10月27日に完了した。

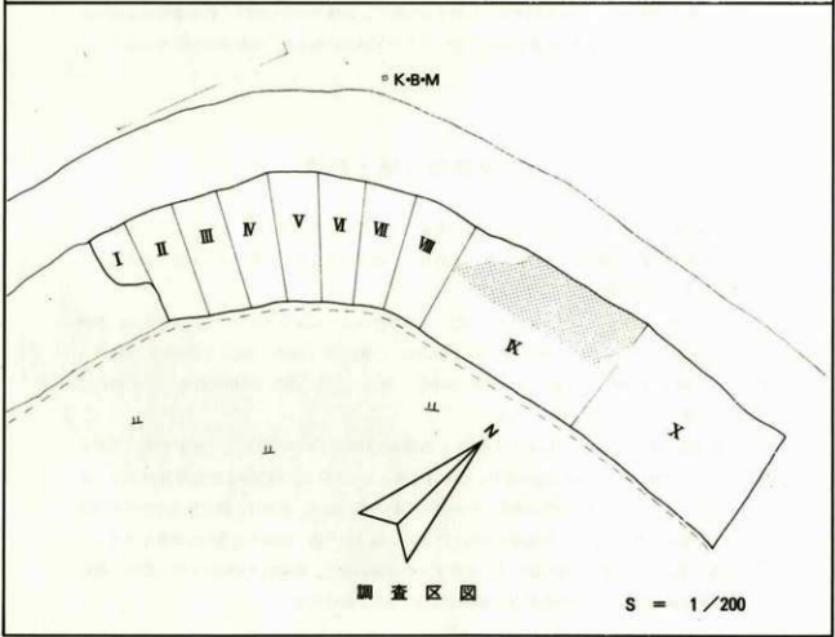
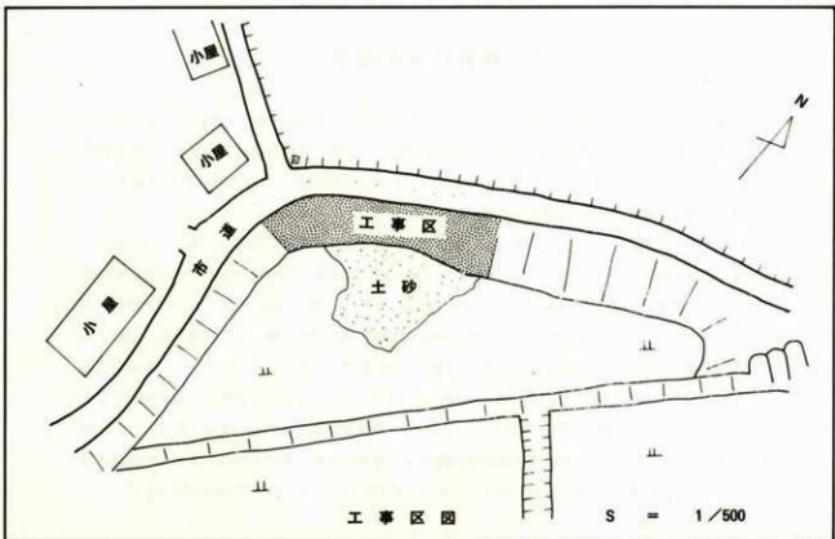
## II 遺跡の立地と環境

大芦遺跡のある岩手県久慈市は、北上山地北東部の太平洋沿岸に位置する。市内の主たる地形は、三陸海岸北部に発達する海岸段丘が開析された丘陵地と、夏井川・久慈川・長内川・宇部川水系に沿った谷底平野及び海岸平野によって形成されている。

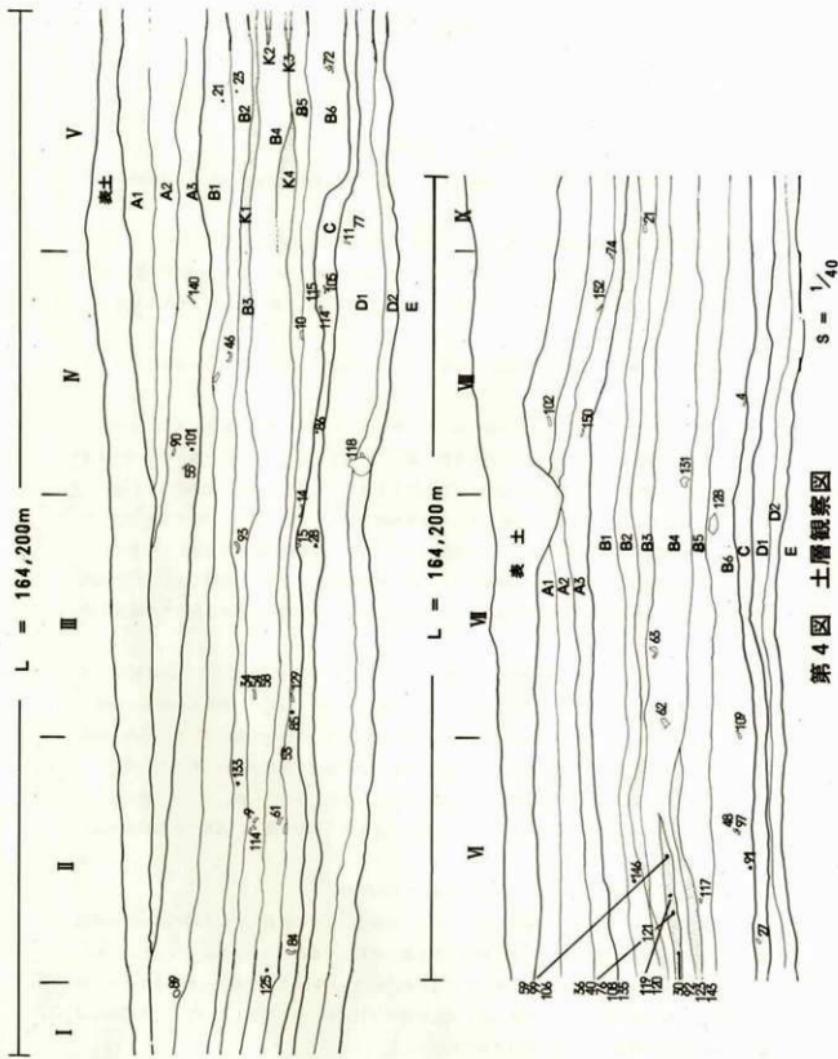
久慈市付近の海岸段丘は、照井一明氏(1982)により次のように区分されている。高位から、水無段丘(220m)、九戸(三崎)段丘(150m~220m)、蒼前平(侍浜)段丘(130m~150m)、麦生段丘(90m~110m)、有家段丘(60m~90m)、種市(二子)段丘(15m~40m)、平内段丘(10m)、宿戸段丘(3m)の順である。

大芦遺跡は、夏井川左岸(河口より約9Km)の標高130m~190mの段丘上に分布する。(第2図参照) 調査地は標高160m付近に在り、直下は水田となっている。調査地北側及び東側には、夏井川に注ぐ湧水がある。夏井川現河床との比高は、約70mである。遺物は、調査地北側及び南西側の畠地と南側の川代小学校付近の畠地に散布しており、縄文時代後・晚期の土器片が採集できる。

大芦遺跡周辺には、北東の高位段丘上に富原I・II遺跡があり、南東約4Kmの九戸(広野)段丘上には広野遺跡群がある。その他周辺の遺跡については第1図に示す。



第3図 発掘調査区図



### III 調査の概要

#### 第1節 調査の方法と経過

調査は、工事予定地点が道路法面の急傾斜面であり大雨災害により土砂が流出している所もあることから、斜面上と崩壊土の中の遺物の回収及び生きている面での遺物包含層の把握と遺構有無の確認を目的とした。

現場での調査期間は、昭和59年8月1日から同年8月11日までの11日間である。

調査地が急傾斜面で直下が水田となっており廃土を置く場所が無いため、まず斜面裾部の平坦面の崩壊土を除去し地山面で遺物が無いことを確認した後、水田との境に土留めをしそこに廃土を積むこととした。

次に、道路端直下から斜面下位の地山上面まで、草刈りを行いながら浮いている遺物を取り上げた。

その後、工事予定区域内を路肩が削れ土嚢（のう）が積まれている部分西端で東半と西半に2分し、西半を工事区西端から東へ2mごとに区切りⅡ区・Ⅲ区……Ⅶ区とした。東半は土嚢を積んでいる部分をⅧ区、その東側をⅨ区とした。また、工事区西側を予備的にⅩ区とし、各々小調査区とした。

この小調査区設定後、比較的削上されておらず遺物堆積の顕著なⅡ区～Ⅶ区について観察を行うこととし、その区域内を生きている面まで下げ（表層下約15～20cm）土層観察図（第4図）を作製した。ただし、この観察図は、道路維持上道路端直下からの土層断面図を作ることが困難なため、Ⅶ区東半に道路端直下から巾約60cmの断面観察用トレレンチを入れ、斜面上で作製した図面に補正を加えたものである。

調査の途中、Ⅷ区からⅨ区のB3層からB5層上面にかけて焼土が検出されたが、これは層状又はレンズ状に3段階にわたって堆積しており住居等の遺構に伴うものではなく、他からの移動（廃棄）によってできた焼土ブロックである。この焼土層の中や周囲では、多数の土器及び土偶などの土製品が出土している。この焼土堆積以外には、石組炉や埋設土器等遺構の存在は認められなかった。

出土遺物は、その出土地点を土層観察図（第4図）に記入し写真撮影を行った後、ナイロン袋に出土した小調査区名・土層を記入して取り上げた。遺物を取り上げた後、平板を使用し調査区を略測量（第5図）した。

室内整理は、昭和60年1月4日から同年3月末日まで行った。

出土遺物は、水洗乾燥後註記・接合を行なながら、小調査区ごとに仕分し出土土層に従って台帳登録を行った。その後、出土遺物の時期・型式と出土層とが対比するかどうかの検討を行った。しかしながら、調査地が斜面上で削れた所があったことや表面に浮いているものが多かったこともあり、擾乱を受けていない所では下層から上層へと古いものから新しいものへと推移していくという傾向は認められるものの、明確な層位的把握はできなかった。

従って、出土遺物の分類は、層位的概念を参考しながらも、器種ごとにその土器のもつ諸特徴により行った。図版中には、参考のため出土した小調査区名・土層を付記した。無記入のものは、表面に浮いているもので一括取り上げたもの、小調査区名のみのものは、崩壊土等から出土したものである。

なお、参考資料として出土地点の明確な完形・準完形土器は、土層観察図（第4図）中に実測図中の番号と対照させて記入した。

## 第2節 土層（層位）

今回の調査は、調査地が道路法面の急傾斜地であったため、通常の平面的な観察ができなかった。また、調査地が大雨災害により路肩が一部崩壊している所であり、正確な土層断面の観察も困難であった。土層の観察は、調査区東半が削土されているため、西半の約14mの部分について斜面上で行い、巾約60cmのサブトレーナーを道路端直下からこれを入れて補った。正確な断面図ではないため土層観察図（第4図）として作製した。

土層は大きく次のように区分される。

- 表 土 道路基盤及び黒色土の搅乱層である。層厚は40~120cmである。
- A 層 黒色土層 搅乱が多い。層厚は0~130cmである。
  - B 層 黒褐色土層 遺物包含層の中心である。層厚は70~230cmである。
  - C 層 粘性のある黒色土層 層厚は20~40cmである。
  - D 層 やや粘りのある黒色土層 層厚は30~100cmである。
  - E 層 小大礫の多い粘土質の黄褐色土層（地山） 層厚は50cm以上である。

遺物はA層からD層まで出土するが、B層にその大半が集中している。時期的には、後期末葉のものが少量で大半が晩期前葉から中葉のものである。A・B層及びD層はさらに細分することが可能である。なお、土層観察図中のK1~K4層は焼土ブロックを示す。

- A1層 10YR 4/1 黒色土 シルト質で小礫を少量含む。シルト質の黒褐色土を約10%混入する。  
密度・硬さとも普通である。粘性はあまりない。
- A2層 10YR 3/1 黒色土 シルト質でA1層より小礫を多く含む。シルト質の暗褐色土を約7%混入する。他はA1層と同様である。
- A3層 10YR 3/1 黒色土 シルト質でカーボン粒を少量含む。シルト質の暗褐色土及び褐色土を約3%混入する。A1層よりやや硬く他は同様である。
- B1層 10YR 3/2 黒褐色土 シルト質で小礫・砂粒・カーボンを少量含む。シルト質の褐色土を約10%混入する。やや硬くしまる。粘性はあまりない。
- B2層 10YR 3/2 黑褐色土 シルト質で小礫を少量含む。シルト質の黒色土を約15%混入する。  
密度・硬さとも普通で、粘性もあまりない。
- B3層 10YR 3/2 黑褐色土 シルト質でカーボン粒を少量含む。シルト質の褐色土を約20%混入する。また、V・VI区で焼土（5 YR%）が層状に堆積する。他はB層と同様である。
- B4層 10YR 3/2 黑褐色土 シルト質で小礫・カーボン粒を少量含む。シルト質の暗褐色土を約5%混入する。V・VI区で焼土（5 YR%）が層状に2段階に分れて堆積する。  
やや粗く、硬さは普通で粘性もあまりない。
- B5層 10YR 3/2 黑褐色土 シルト質ではB4層と同様であるが、ややしまる。

- B 6 層 10YR 5/2 黒褐色土 シルト質ではほ 層と同様であるが、カーボン粒と小礫がやや多い。
- C 層 10YR 5/2 黒色土 粘土質で大形礫・カーボン粒少量を含む。強くしまりやや硬い。
- D 1 層 10YR 5/2 黒色土 粘土質であるが粘性が弱い。カーボン粒を少量含む。やや硬くしまる。
- D 2 層 10YR 5/2 黒色土 層とほほ同様であるが、粘性が弱くシルト質の褐色土を約10%混入する。
- E 層 10YR 5/2 にぶい黄褐色土 粘土質で大小の礫を多く含む。（地山）

## IV 遺 物

今回の調査では、土器・石器等の遺物が15箱で約30箱出土しており、そのうち完形品または推定復元可能な土器は約200点である。調査地が道路法面上であったため、人為的あるいは自然営力による搅乱を受けており、遺物の量は多かったもののその層位的把握は困難であった。

以下、土器・土製品・石器・石製品の順でとりあげることとする。

### 第1節 土 器

本調査で出土した土器は、破片（同一個体のものを除く）も含めると約2000個体分である。その所属時期は、大略縄文時代後期末葉から晩期中葉である。特に大洞B-C式のものと大洞C1式期のものが卓越する。

調査にあたっては層位的な遺物の取り上げを心がけたが、調査地が開田のため削土されたり大雨による路肩崩壊を受けており、搅乱が激しく出土土器の正確な層位的把握ができなかった。このため、本稿においては、土器のもつ諸特徴に留意し器種ごとの分類を中心とした。参考資料として実測土器のうち主要なものを、土層観察図（第4図）に実測図中の番号で記入してある。

#### A 深鉢形土器（第5・6図、第17~25図）

器形は、外傾気味の体部下半から直上気味に移行する体部上半をもちそのまま口唇に達するものと、体部最上位付近で内湾気味に変化し後口唇にむかって外反気味になるものとがある。したがって、前者においては口縁部と体部が未分化であり、後者では口縁部と体部とが分化している。

口径よりも器高のはうが大きく、体部には縄文が施文される。最大径は、前者の場合は口唇にあり、後者の場合には体部上端付近にあるものと口唇にあるものとがある。

成形は数cmの粘土紐の積み上げ及び接合によっている。器面調整は、ヘラケズリを行った後外面には縄文が施文され、内面はヘラナデ・ヘラミガキなどで仕上げられる。底部外面はヘラミガキである。縄文は横位回転の斜縄文（帯状）が多く、結節のない同一原体による羽状縄文も併存する。不整なものもあるが、丁寧に縄文が施文されたものが多い。これらの土器の器内外両面には、例外なく煤と思われる炭化物が付着している。

これらの土器は、器形から2大別され、さらに口縁の形態等の諸特徴から細分できる。その所属時期については土器の特徴により認定が可能なものもあるが、遺構に伴っておらずまた出土位置（層）と時期・型式との関係が明確でないため判然としない。ここでは大略縄文時代後期末葉から晩期中葉のものと考えておく。

##### (1) 深鉢形土器第1類（第5図1~3、第6図4、第17図1~第21図64）

口縁部と体部が分化していないもので、平縁のものである。

1-a類（第5図1、第17図1～第19図25）

口唇直下（口縁端部外面）に無文帯を伴わず、縄文のみが施文されるものである。帯状の斜縄文が多いが、同一原体による羽状縄文をもつ（第19図21・22など）場合もある。補修孔があるもの（第19図23・24）や口縁相当部に瘤状突起が付されるもの（同図25）もある。

1-b類（第5図2・3、第20図43～第21図64）

口唇直下に無文帯のあるもので、それ以下には縄文のみが施文される。口唇上に縄文を持つもの（第20図44）もある。便宜上、全面無文のもの（第5図3）も含めてある。

1-c類（第19図26～第20図36）

平縁で2ヶ一対の小突起が口唇上に付されるものである。体部は縄文のみである。

1-d類（第20図37～42）

平縁で口唇直下に沈線をもつものである。体部には縄文が施文される。

1-e類（第5図4）

平縁で口唇直下に全周にわたって突起が貼付されるものである。口唇内面は稜をなす。突起は指でつまんだように貼付され、一定間隔で体部上端を一周する。破片の一例のみであるが、体部上半はやや不整な浅い沈線で鍵形状に区画したのち、区画内に縄文を施文している。縄文は単節LRで縦方向に施文されるが、区画内をはみだしており不整な感が強い。入組帶状の区画内は非肉形的である。

（2）同第2類（第5図10、第21図65～第23図88）

口縁部と体部が未分化のもので、口唇上が押圧（上方からの圧力）によるものである。体部には縄文が施文される。口唇直下に無文部がないものとあるものとに分けられる。

2-a類（第5図10、第21図65～第23図83）

口縁が押圧により小波状を呈するもので、口唇直下に無文帯をもたず、縄文のみが施文されるものである。

2-b類（第23図84～88）

口縁が押圧により小波状を呈するもので、口唇直下に無文帯をもつものである。それ以下には縄文のみが施文される。

（3）同第3類（第24図89～96）

口縁部と体部が分化していないもので、口唇上に刻み目が施され口縁が小波状となるものである。体部には縄文が施文される。口縁相当部に沈線をもつもの（第24図89～91）もある。

（4）同第4類（第5図5、第24図97～103）

口縁部と体部が分化しているもので、平縁をもち体部に縄文が施文されるものである。縄文は斜縄文または羽状縄文であるが、大略整然と施文される。全面縄文のものと口縁部に無文部をもつものがある。器形には大小がある。屈曲部の内面には棱をもつ。全面無文（第5図5）のものも一括した。

(5) 同第5類 (第5図6、第25図104)

口縁部と体部が分化しているもので、口唇外面に圧力による凹凸をもち口縁部が無文のものである。体部には斜縞文が施文される。第5図6は体部との境界に3条の沈線をもつ。

(6) 同第6類 (第5図8、第25図105・106)

口縁部と体部が分化しているもので、口唇に刻み目をもつものである。第5図8は口縁・体部とも無文であり、口縁の波状が不整である。体部上端近くで強く内湾した後直上する。第25図106は細い刻み目で無文の口縁部をもち、体部には縞文が施文されるものである。口唇内面に稜をもつ。

(7) 同第7類 (第5図7、第25図107)

口縁部と体部が分化しているもので、口唇に彫刻的な刻みが施されるものである。体部には縞文が施文される。第5図7は口縁部に3条の沈線をもち、体部には無節の縞文がやや不整に施文されている。第25図107は無文の口縁部をもち、体部には縞文が施文される。口唇外面は彫刻的な刻み目により、2ヶ一対の小突起が表出される。内面には沈線を1条もつ。

(8) 同第8類 (第25図108)

口縁部と体部が分化しているもので、口唇上が斜位刻み目風で3ヶ一対の中突起が貼付されているものである。中央の突起が大きく両側のものが小さい。無文の口縁部はナデで調整されている。体部との境には2条の沈線が付される。沈線のつけ方は粗く、両沈線間の隆帯部にも縞文が残る。体部外面にはやや粗い斜縞文が施文される。内面にはナデ調整痕が顕著である。

(9) 同第9類 (第25図109・110)

同一個体の口縁部と体部上半である。山形口縁をもつもので、口唇直下と体部上半に沈線文をもちその間は無文部として残る。体部上半の沈線以下はやや不整な単節RL縞文が施文される。内面はナデにより調整されるが、指頭圧様の凹凸が残る。器面外面には全体に煤様のものが付着する。

(10) 同第10類 (第5図9～第6図20)

分類基準は違うが、体部下半～底部片をここに一括した。

これらすべての土器の体下半部には縞文が施文される。縞文はそのほとんどが単節LR斜縞文であるが、やや不整なものと整然なものとの二者に大別される。

そのほとんどが平底であるが、19は砲弾状を呈し丸底盤である。

9の底部外面には焼成時のものと思われる亀裂が入っている。

15の下端部には無文部が設けられ、底部及び内面とともに丁寧にナデ乃至ミガキが施されている。

14の体下半部には不規則な沈線が横走り、縞文原体端部による刺突状のものが部分的に観察される。

以上の深鉢形土器の所属時期については、出土層と時期・型式が明確に対応しないため判然としない。ここでは、その口縁部形態や施文方法等から1-e類と9類は後期末葉のもの、1-c類と6～8類は晩期中葉～後葉のもの、1-a・b・d類と2～5類は晩期前葉～中葉のものとしておくにと

どめる。

#### B 鉢 形 土 器 (第6図21～第8図59、第26図111～第23図283)

深鉢形よりは器高の低いものを鉢形とした。この中には、所謂浅鉢形といわれるものや台付鉢の鉢部と思われるものも入っている。口縁部形態、施文等で細分できる。

##### (1) 鉢形第1類 (第7図24、第26図111～117)

晩期初頭に相当するものを一括した。器形は各種あるようであるが、入組文・三叉文や所謂魚眼文をもつものである。口縁は平縁乃至突起によるもので、直上あるいは外傾ぎみのものが多い。体部上半には沈線文である三叉文の変種文等が施文される。体部下半は斜縄文が多い。

24は口縁と体部が分化しているもので、平縁をもち口縁部は無文で直立する。体部との境には段がある。体部には、C字文等の三叉文系のものと思われる沈線が施文され、その区画内に無節R縄文が施される。

##### (2) 同第2類 (第7図28、第26図118～127)

口縁部と体部上半に文様帯をもつもので、文様帯の上限と下限に刻み目帯をもつものである。下限は沈線によるものもある。この刻み帯の区画内に施されるものには、K字文・羊齒状文・C字文等である。この他には刻み目帯や沈線の場合もある。大洞B—C式期に相当するものである。

28は平縁に小突起が付加される口縁をもち、口縁部と体部が分化している。口縁は直上する。口縁部には刻み目帯と平行沈線が施され、体部上半にはK字文系の磨消縄文が施文される。体部下半との境に平行沈線2条をもち、それ以下は斜縄文が施される。底部は平底である。

##### (3) 同第3類 (第26図128～130)

口縁部と体部が未分化のもので、体部上半から口唇にむかって内湾気味に直上するものである。口唇は刻み目等による単純な小波状か、2ヶ一対の突起による小波状である。口唇内側に稜乃至段をもつものが多い。口縁相当部に真正の羊齒状文をもつものをこの類とした。この羊齒状文にはいくつかの種類があり、①末端が噛みあう右上りのもの②末端の噛み合わない右下りのもの③羊齒状文に刻み目帯が併用されているもの④やや直線的で平均的な羊齒状文をもつもの等がある。文様帯の下限は平行沈線で、それ以下は斜縄文または羽状縄文となる。体下端部には2つの平行沈線をもち、それ以下は無文となるものである。底部は平底で外面は研磨される。大洞B—C式期に相当しよう。

##### (4) 同第4類 (第7図25、第27図131～133)

口縁部と体部が未分化で、体端部にむかって内湾気味に直上するものである。口縁相当部の文様帯が羊齒状文以外のものをこの類とした。他の点は第3類と同様である。

25は高壙乃至台付浅鉢のものと思われ疑問があるが、一応ここに入れた。これもB—C期であろう。

#### (5) 同第5類 (第7図29・30・32・33、第27図134～第29図187)

体部が内湾気味に立ち上がり端部が直上気味となるものと、口縁部と体部が分化し口縁が直上するものとがある。前者は平縁で口唇に平行して刻み目帯をもつ。後者は平縁に小突起が付加され口縁部に刻み目帯と直線的な羊歯状文をもつものと、口唇に彫刻的な刻み目をもち口縁部に羊歯状文をもつものとがある。

文様は体部全面に施され、文様帶の上下限に平行沈線をもつものである。その区画内には、大腿骨状文及びその変形文が主要モチーフとして展開される。体下端の平行沈線以下は無文・研磨されるものと、繩文施文のものとがある。底部は丸底風の平底であり、中央が周縁より高くなっているものが多く不安定である。

29・30は第2類に類似する点も多いが、大洞C1式期のほうに近いと考えこの類に含めた。

30は所謂四脚土器といわれるものである。これらは大洞C1式期のものと思われる。

#### (6) 同第6類 (第29図188～204)

体部下半から体部上半が外反気味となり、体上端部付近で急激に屈曲し内傾するものである。文様帶はこの屈曲部から口縁部にかけて設けられ、直線的な羊歯状文や刻み目帯をもつものである。この文様帶の上・下限は、沈線または刻み目帯である。口唇は2ヶ一対の小突起や彫刻的な刻み目による小波状が多い。体部には入念な斜繩文が施されることが多い。揚げ底風の底部をもつものが多い。刻み目帯には、一定間隔毎に巾広部分をもつものと等間隔に刻まれるものがある。大洞C1期に相当しよう。

#### (7) 同第7類 (第7図34・35・38、第30図205～213)

全面無文のものである。器形には大小があり、ミニチュア土器的なものもある。平底のものと丸底のものがあると思われる。

34は平底をもつものと思われ、小波状化された口縁をもつ。

35・38は丸底風になるものと思われ、ナデ・ミガキ調整痕が残る。35は器面内面に輪積痕が残っている。

#### (8) 同第8類 (第7図40～42、第30図214～第31図220)

口唇下外面に2～3本の沈線をもち、それ以外は無文のものである。器形は各種あるが一括した。器面外面の無文部は研磨され、朱彩が残ることが多い。内面は横方向あるいは放射状に入念にミガキ調整されている。

40は内外とも黒色処理化されており、外面には朱彩が部分的に残存している。

41は口唇上に沈線が1条めぐっており、口唇下内面にも沈線を1条もっている。

42は口縁部と体部が分化しており、外面全面及び口縁部内面に朱彩が残っている。所謂広口壺的なものである。

(9) 同第9類 (第8図43・44、47~49、第31図221~229)

体部外面に縄文のみが施されるものを一括した。器形には各種あるが、口縁部直下から縄文が施されるものと口縁部に無文帶をもつものがある。補修孔をもつものや口唇下に突起をもつものもある。平縁が多いが口唇上に刻み目が施されるものもある。

44・47は台部を伴うものかもしれないが、この類に含めた。

(10) 同第10類 (第8図51~53、第31図230~第32図256)

口縁部に平行沈線2~3条をもつものである。体部には斜縄文あるいは羽状縄文が施される。口唇は小波状化されるものと、2ヶ一対の小突起によるものがある。体下端にも沈線をもち、底部は揚げ底風になるものが多い。器形は大小あるが、それにかかわらず内外両面に煤が付着している。

51は口縁部が屈曲・内傾気味に直上し、口唇が小波化される。

52は口縁が外反気味に直上し、口唇は平縁で2ヶ一対の小突起が付加される。

53は体部との境に2ヶ一対の突起が貼付され、それを沈線2条で結ぶ。

(11) 同第11類 (第8図54・55、第32図257~第33図265)

10類よりも沈線が太いものである。大型品が多い。

他は7類と同様である。

54は彫刻的な口縁をもち、体部上半に未貫通の円形の孔を有するものである。口唇外面にタール状の付着物が残る。

55はやや不整な刻み目による口縁をもち、体上端付近の屈曲部に稜をもつものである。内面上位に爪形状の刺突がある。

(12) 同第12類 (第33図266~269)

口縁部に複数沈線を有するものである。

口縁・体部が未分化で、外傾気味の体部をもつそのまま口唇に達するものである。口唇上に小突起をもつものと、刻み目により小波状となるものとがある。体部は無文・研磨の場合が多いが、縄文が施されるものもある。

(13) 同第13類 (第8図56・58・59、第33図270~272)

口縁・体部が分化しているもので、体部上半で屈曲・内傾し直上あるいは端部が外傾するものである。口縁部文様帶が平行沈線のみのものと、刺突文や兀字状の貼付突起を伴うものとがある。口唇には外側からの彫刻的な刻み目をもつ。

(14) 同第14類 (第6図21~23)

所謂彩文土器を独立させた。大洞C1式期のものと思われる。

21は口縁部片であるが、第3類のものと思われる。内面に雲影文系と思われる彩文が施され、口縁端部外面には朱彩が明瞭に残っている。22も同様である。23の外面には朱彩が残っていない。

(15) 同第15類 (第7図26・27・31・36・37・39、第8図45・46・50・57、第33図273～283)

体部下半～底部のものである。

実測したものは、その該当すると思われる類のところに配した。

択影図の273～276は無文の底部で、7類乃至11類のものと思われる。277・278は5類のものと思われ、282・283は2類のものと思われる。

第1類～第6類及び第14類以外のものの所属時期は、ここでは大略第7～11類が晩期前半、第12・13類が晩期中葉のものとしておくにとどめる。

#### C 台付鉢形土器 (第9図60～65)

完形品及び復元可能なものが少い上、鉢部だけ現存のものは鉢類に含めているため、ここでは所謂高环形のものも含め次の6点のみをとりあげることとする。

##### (1) 台付鉢形第1類 (第9図60・61)

所謂高环形のものと思われる鉢(胴)部のものと脚上部のものをこの類とした。

比較的高い脚部をもち、鉢部の装飾度が高いものである。

60は彫刻的な刻み目と大突起を口唇上にもち、口縁部は無文で研磨されている。体部全面に施文されるが、上・下限は2～3本の沈線である。体部全面に施文され、そのモチーフはX字状文・C字文などである。内面もよく研磨されており、精製度の高いものである。

61は鉢部の底部と脚部上半のみのものであるが、スカシが施されており装飾度の高いものである。鉢部外面及び脚部内面には朱彩が施されている。底部内面は黒色処理されている。

これらは、大洞C1式期のものと思われる。

##### (2) 同第2類 (第9図62)

鉢部が口縁・体部に分化しないもので、底部から口唇までゆるやかに外傾していくものである。台(脚)部はどっしりとしており、下端部には縄文が施されているものである。

口唇上に刻み目をもち、その直下に刻み目と口唇に連続する沈線をもつ。それ以下に平行沈線2条をもち、体部文様帶の上限としている。体部文様帶はやや雑であり、そのモチーフはC字文及び変形X字状文などである。

大洞B～C式期の新しい部分か大洞C1式期の古い部分に属するものと思われる。

##### (3) 同第3類 (第9図63)

半精製的なもので、鉢部は鉢形第10類のものに類似する。

口唇上は深い刻みにより小波状風となる。口縁部には2条の沈線がめぐり、その間には刺突様の短沈線文が付される。

体部には単節のLR縄文が施される。底部及び台部と端にはやや雑な沈線が施され、それ以下の台部は無文である。台部下端にも沈線をもつ。鉢部外面には煤様のものが厚く付着している。鉢部内面

と台部内面にも煤様のものが残存しており、火にかけられたものと思われる。

大洞C1式期のものと思われる。

(4) 同第4類 (第9図64)

粗製の小形台付鉢である。鉢部外面全面に、単節LRの縄文が施される。鉢部内面及び台部の両面はナデ・ミガキ調整である。鉢部と台部の境には沈線が施される。晩期前半のものであろう。

(5) 同第5類 (第9図65)

精製の鉢部下から台部のものである。底・台部内面が2次焼成により黒色化している。

D 脚 部・台 部 (第9図65~84、第34図295~309)

脚乃至台部だけのものである。

(1) a類 (第9図66~68、第34図296・297・306)

台部の外面に縄文が付されるものである。

66は裾部に縄文が付されるもので、底部内面及び台部内面天井部は黒色処理されている。

67は台部外面の下端部を除く全面に縄文が付されるもので、沈線を上・下限に伴う。

68は台下半部に縄文が付されるもので、間に1条の沈線を伴う。

(2) b類 (第9図69・70、第34図300~304)

台部外面に沈線のみが付され他は無文のものである。

70は精製のもので、台部内面にも朱彩が施されてあるものである。

(3) c類 (第9図71、第34図295・298)

台部外面に文様(スカシ・刻み目)等をもつものである。

71は、台部と鉢部との境に鎖状の文様帯が貼付されているものである。底部内面と台部両面はケズリ後ミガキ調整である。鉢部外面には煤様のものが付着している。台部内面には火熱痕が観察される。

(4) d類 (第9図72~83、第34図299・307~309)

脚乃至台部外面が無文のものである。

台部の形状等各種あるが一括した。台部が大きく高いもので脚的なもの(第9図72~74など)・精製の台部で大きくどっしりとしたもの(同図75)・台部が小さいもの(同図79・80)がある。

(5) e類 (第10図84)

所謂高环形の脚部であると思われるが、下端部を水平に欠き磨いており二次的使用に供した可能性のあるものである。体部の底部は外面の接合部が若干残るのみである。脚部上位(図では下位)には沈線が1条めぐり、接合部にかけての縄文帯と脚下半の文様帯とを区画している。沈線以下の文様帯

には曲線的な沈線文が施されている。沈線文の区画内には単節LR繩文が残り、他の無文部は研磨されている。内面も研磨され平滑であるが、煤様の付着が部分的に認められる。

#### E 盆形土器（第10図85～95、第34図284～294）

口径に比べて器高が極端に小さいものである。

##### (1) 盆形土器第1類（第34図284）

半欠品の一例のみのものであるが、体部文様帶に唐草文風の沈線文を有するものである。体部から端部へゆるやかに外反するもので、平縁をもち口唇直下に沈線1条を伴う。

##### (2) 同第2類（第10図85～89、第34図285～289）

体部上半が弓なり状に強く外反するものである。

口唇は2ヶ一対の小突起や彫刻的な刻み目により装飾的に仕上げられる。口唇直下と底部との境には、沈線や刻み目帯が施される。この区画内に大鰐骨文系のものや三叉文の変種などが施文される。

85は体部文様帶類似のものを底部外面にもつものである。

89は無文の小盆であるがここに含めた。

##### (3) 同第3類（第10図90）

体下半～底部片であるが、底部から体部へゆるやかに立ち上がるもので、底部と体部との境に沈線1条を持つものである。体部文様帶の主要モチーフは大鰐骨文系のものである。内外に煤様のものが付着している。

##### (4) 同第4類（第10図91～95）

底部から端部にむかって内湾気味に直上するものを一括した。体部が無文のもの（91・92）と繩文あるいは沈線が付されるもの（93・94・95）がある。底部の形状も揚げ底風のもの（91・92）や丸底のもの（93）それに平底のもの（94・95）がある。92は上部内面に沈線をもち、95は底部外面にも調文をもつ。

##### (5) 同第5類（第34図290～294）

無文の底・体部片を一括した。

以上のものには所謂浅鉢的なものもあるが一応この項に区分した。その所属時期については不明な点も多いため、ここでは晩期前半（特に大洞B—C乃至大洞C1式期）のものとするにとどめる。

## F 壺 形 土 器 (第11図96～第13図117、第35図310～第36図333)

有頸で細口のものと無頸で広口壺的なものを一括にした。

### (1) 壺形土器第1類 (第13図98～104、第35図310)

粗製のもので、直立する頸部となじみ的な肩部をもつものである。体部の形状は卵形になる。平縁が多く、口縁部は無文で研磨されることが多い。体部には縦文が付されるが、そのほとんどが横位回転の単節LR縦文である。やや不整なものもある。器形には大小がある。

101と102は口唇上に2ヶ一対の中突起をもつ。101の口縁部内面下位には指頭痕が残る。104の口唇直下にも、指頭によるものと思われる押圧痕が残る。

### (2) 同第2類 (第13図105、第35図311～313)

精製のもので、口頸部が外反気味に内傾するものである。体部の形状は逆卵形になるものと思われる。

頸基部と体部を接合しているものとみられ、境目に段乃至棱をもっている。体部には、横位回転の単節LR縦文が付される。整然としたものが多い。

### (3) 同第3類 (第13図105・106、第35図314～319)

無文・研磨の外反する口縁部をもつものである。

肩下り的な体部をもち、口頸部と体部との境には段が形成される。体部は無文・研磨のものと縦文施文のものとがある。縦文は、帯状の単節LR斜縦文が多い。

107は口唇が肥厚するもので、最大径が口唇にあるものである。器面外面全面と内面の口頸部には、朱彩が顕著に残存している。

### (4) 同第4類 (第11図96、第12図97、第13図108～112、第35図320～第36図331)

内傾する頸部と外反する口縁部をもち、頸基部付近に装飾的な瘤状突起をもつものである。

平縁に2ヶ一対の小突起が付される口縁をもつものと、小突起や斜位刻み目風の小波状口縁をもつものとがある。

体部外面が無文・研磨のものと文様帶のあるものとがあるが、より装飾的・より精製品的な感がするものが多い。これらの土器には例外なく外面全面に朱彩が施される。

96は頸中央部に2条の隆帯をめぐらし頸部文様帶とそれより上位の無文部とを区画している。隆帯以下の頸部と肩部には、2ヶ一対の瘤状突起とそれに連結する羊齒状文風の貼り付け帯が装飾的に付され、その上下及び区画内にC字文的なものが刻まれる。その下には羊齒状文帶が付けられる。体部文様帶は上下限の沈線で区画され、K字状文的な大脛骨文系のものが施文される。沈線以下の体部下半は、無文化され丁寧に研磨されている。内外両面とも丁寧に研磨調整され、朱彩が施されている。

97は96とはほぼ同様であるが、肩部文様帶の下限である沈線以下の体部に縦文をもつものである。

108は頸基部に瘤状突起と粘土紐による装飾帶をもち、口縁部と頸部の境及び肩部に沈線を施すものである。口縁部内外両面にも沈線を伴う。他は無文・研磨され朱彩が残るものである。

110~112は頸基部付近のものであるが、いずれも装飾的な瘤状突起と粘土縫の張り付け帯を伴うものである。これらは剥落しているものもあるが、全面に朱彩が施されてあったものと思われる。

(5) 同第5類 (第13図113・114、第36図332)

口縫部と頸部が分化しており、口縫が水平に張り出すものである。

精製の度合が高く、そのすべてに朱彩が施される。

113は口唇上に2ヶ一対の突起をもつもので、頸基部に瘤状突起を伴う浅い沈線で表出された2条の隆脊(線)が付されるものである。113は平縫で口唇上に沈線が付される。これらの内外両面は、丁寧に研磨され平滑である。

(6) 同第6類 (第13図115~117、第36図334)

無文の体～底部片を一括した。

115・116の外面には朱彩が残る。第3類乃至第4類のものであると思われる。

以上の土器は晩期前半(大洞B-C~C1式期)のものと思われる。

G 注 口 土 器 (第14図118~第15図128、第36図334~350)

所謂注口をもつ土器である。

この土器群の分類は文様帶に付加されるモチーフを主体とし、器形を加味して行った。

(1) 注口土器第1類 (第14図118)

後期末葉のものである。1点のみであるが区分した。

所謂張瘤土器と呼ばれるものである。

口唇上は突起により波状化される。口頸部は直立し、上位・中位・基部に各々張瘤を伴った沈線が2条乃至3条めぐるものである。沈線で区画された中には、縄文が充填される。体部中位には張瘤突起が3個付され、それと同位のところに注口が付けられている。体部文様帶には「タスキ」様の磨消縄文を伴った曲線文が展開する。体部下半とは沈線で区画される。体部下半には縄文が残る。底部はやや揚げ底風の平底で、外面は研磨される。

この土器は十腰内N~V群に比定されるものと思われる。

(2) 同第2類 (第14図121、第36図334~339)

文様帶に刻み目帯や羊齒状文類似文あるいはK字文風のものをもつものである。

内湾気味に立ち上がる口縫を有し、口唇上には突起等がつくり出されるものである。

口縫と頸部が分化しているものと分化していないものの両者がある。

121は口縫部と頸部が分化しており、口唇上には3ヶ一対の中突起とその両側に2ヶ一対の小突起をもつものである。内湾気味に立ち上がる口縫部には、外面に三叉的な陰刻文が施される。頸部上端には刻み目帯が付けられる。

これらの土器は大洞B式から大洞B—C式期の古いほうのものと思われる

(3) 同第3類 (第14図122、第36図340)

口縁部と頸部が未分化のもので、頸部が内傾し全形が所謂算盤玉状になるものである。

頸部文様帶の上限に半截羊歯状文を配している。下限は沈線あるいは羊歯状文類似文帶である。その区画内にはK字文が施文される。頸部下端には無文部が残る。底部は丸底になるものと思われる。肩部には羊歯状文風の刻み目が付く。

大洞B—C式期のものである。

(4) 同第4類 (第14図123~125、第15図128、第36図341~350)

施文モチーフに磨消繩文が使用されるものである。

主要モチーフはK字文・X字状文・大腿骨文等である。口縁が平縁のものと、口唇が小波状化され正面觀を意識した大突起がつけられるものとがある。口頸部が分化しているものが多い。体下半部が深いものが多い。

これらの土器は大洞C1式期のものに相当すると思われる。

(5) 同第5類 (第14図119・120・126・127)

分類基準は異なるが、頸・体部が無文・研磨される半欠品と注口部片を一括した。

119は内澆氣味に直上する頸部と球状の体部をもつものである。全面無文のもので注口部が欠失しているが、注口基部の接合部にアスファルトが厚く付着している。

120は注口基部の破片である。注口基部付近に文様が認められない。

126は注口のみの破片であるが、肥厚部分がないものである。

127は注口部片であるが、注口基部に三叉文風の陰刻文が付加される。第3類のものである可能性が高い。

H ミニチュア土器 (第16図135~154)

所謂「袖珍」の範疇に入ると思われるものを一括してある。

器種・器形も各種各様である。無文・研磨の部分が大部分である。

135は上部を欠失しており、外面剥落が著しい。内面はナデ調整である。

137は口縁・体部が分化しているもので、その境に沈線2条をもち体部には繩文が残るものである。

138は口唇上に刻み目をもつものである。

139は内外両面ともミガキ調整されているが、底部付近に煤様のものが付着している。

140は口縁・体部が分化しており、境に段をもつものである。丸底型である。

141は丸底の鉢形で、口唇直下に沈線文をもつ。

142は手捏ね様のもので、外面に輪積痕が認められる。

143は口唇に斜位刻み目のあるものである。内外ナデ・ミガキ調整である。

144は斜位刻み目による口縁をもつ小皿で、口唇直下に沈線をもつ。2次焼成により外面が黒色化

している。

145は内外両面が丁寧にミガキ調整されている精製のものである。

146は手捏ね様の粗製土器で、外面の凹凸が顕著である。

147は外面がミガキ・内面が指ナデ調整である。

148は内外両面が手捏ね様で指痕が認められる。

151は口縁・体部が分化しており、肩部に瘤状突起を伴う3条の沈線をもつものである。

153は口縁部が大きく外反するもので、円形の小刺突を伴った斜位刻み目風の口唇をもつものである。内外両面ともミガキ調整である。

154は細口の長頸壺である。壺形第5類に分類されるものであろう。口縁と頸部及び体部が分化しており、文様帶は頸下部及び体部全面である。平縁で外に張り出した口唇上には沈線が付される。長い頸部は直立し、上半は無文・研磨され下半文様帶との境には2ヶ一対の突起が4個付される。頸下半には概述の突起から頸基部にかけて、陰刻により大脛骨文様のものが表出される。頸基部から肩部にかけて研磨された無文部が設けられ、体部上端及び下端には沈線を伴い、その区画内に大脛骨文の変形文が施文される。体下端はやや突出し揚げ底風の底部をもつ。底部外面は無文・研磨される。器面外面と口縁部内面には、朱塗が明瞭に残存する。152はこの種土器のものであろう。

#### I その他の土器 (第15図129~134)

ここでは、類似の器形が出土していないやや特殊なものをとりあげることとする。

##### a類 (第15図129)

所謂筒形土器の部類に属するものである。全体形がややいびつなっている。内外とも無文である。外面は口縁部が喉ミガキ後横ミガキで、それ以下の体(胴)部が巾3~5%の縱方向のミガキである。底部外面は多方向へのミガキ調整である。

##### b類 (第15図130・131)

体下半乃至底部が張るもので、外反する口縁部をもつものである。口縁部は外反する。

131は、水平に張り出した口唇上に2ヶ一対の小突起をもつものである。2ヶ一対の瘤状突起とそれに連結する沈線で表出される隆線をもち、その上は無文・研磨の頸部となる。これ以下にも隆線が体下端まで3段にわたり付され、それぞれの区画内に文様帶をもつ。この文様帶のモチーフは3段にわたって施文されるが、上位にC字文的なもの、中位に大脛骨文系のもの、最下位に末端の尖るX字状の大脛骨文系のものが施される。内面及び外面の無文部は丁寧に研磨される。

130は外反する口縁部をもち、口唇直下に沈線を2条もつ。口縁基部と体下端部には、沈線で表出された隆線をもち文様帶を区画する。この区画された文様帶には、大脛骨文の変種と思われるはち巻文的な磨消繩文が付される。外に張り出す体下端部には、羊齒状文風ともみえるものが刻みにより表出される。内外両面とも黒色処理・研磨される。

以上の土器は大洞C1式期のものと思われる。

c 類 (第15図132)

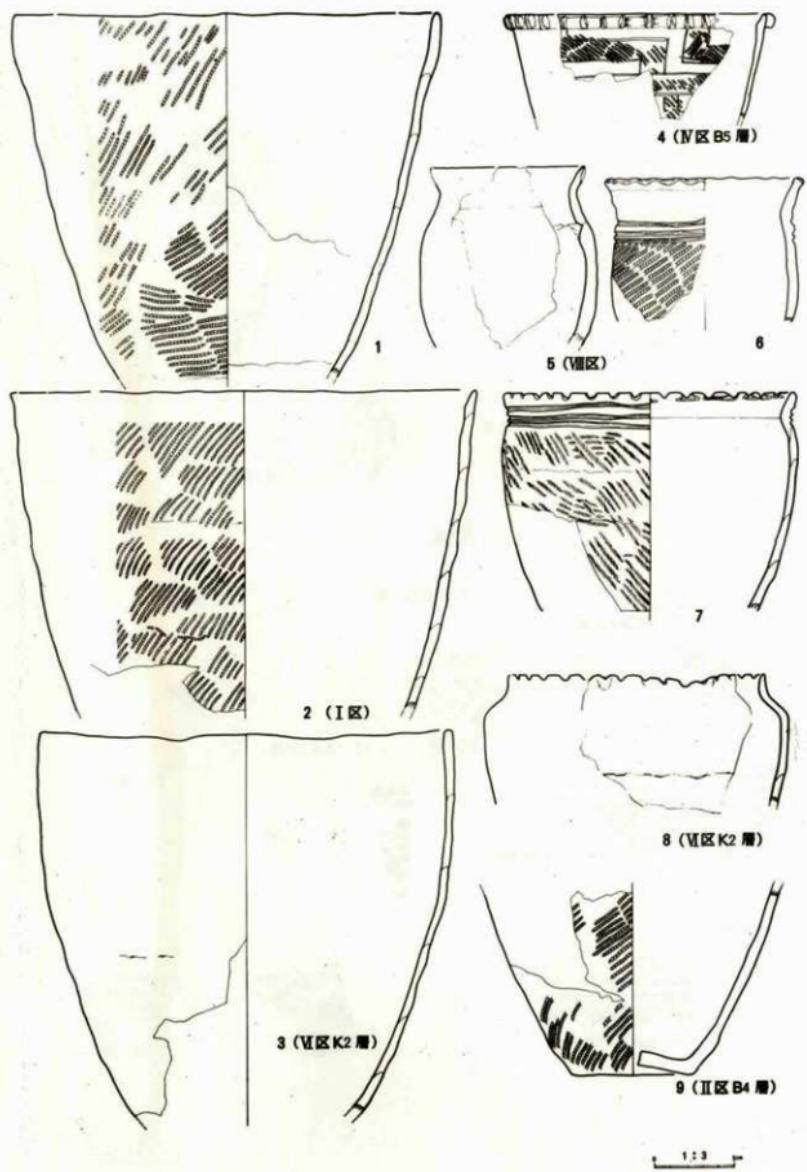
香炉形土器の肩部片である。肩部張り出し部に2ヶ一対の突起が付され、その上位に三叉文風のスカシをもつものである。内外とも黒色処理・研磨される。

d 類 (第15図133)

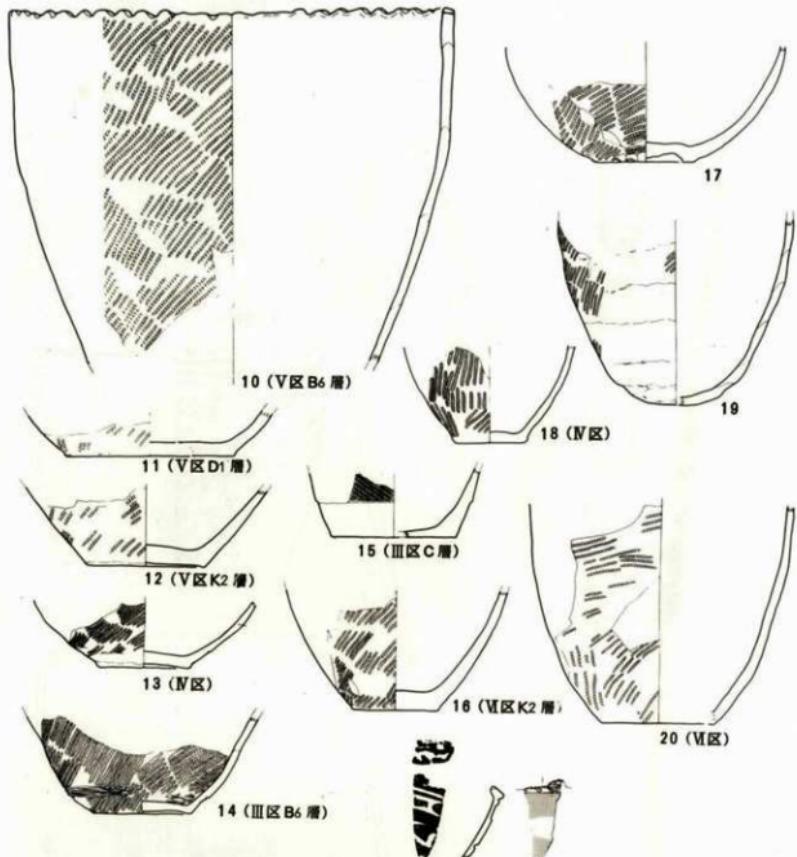
所謂片口土器の片口部片である。手捏ね様の成形で、内外ナデ乃至ミガキ調整である。

e 類 (第15図134)

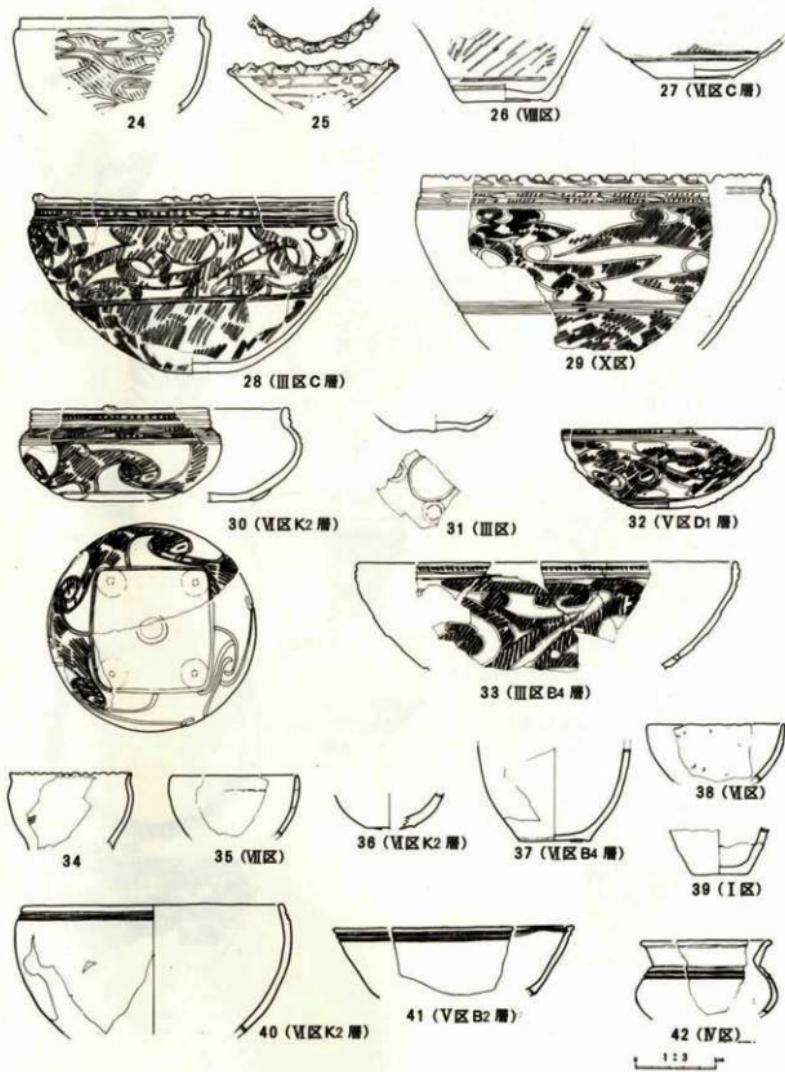
所謂把手付土器の把手部と思われるものである。渦巻状に沈線が付される。内外ともミガキ調整である。



第5図 土器実測図(1) 深鉢型-1



第6図 土器実測図（2） 深鉢型—2, 彩文土器

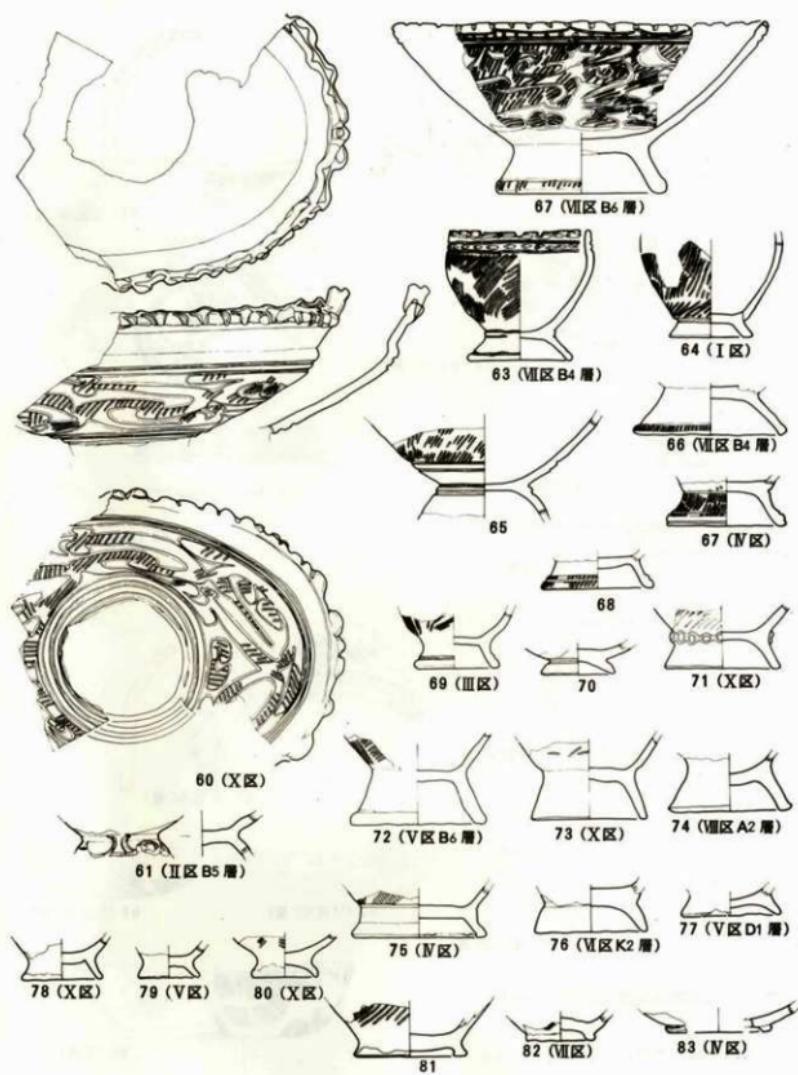


第7図 土器実測図（3） 鉢型—1



1 : 3

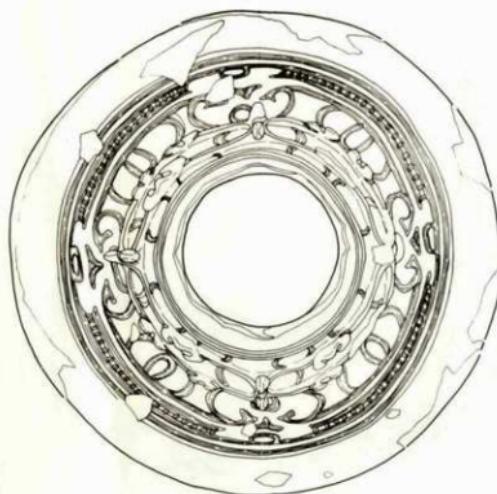
第8図 土器実測図(4) 鉢型—2



第9図 土器実測図(5) 台付鉢型、台・脚部-1



第10図 土器実測図 (6) 台・脚部—2,皿型



96



1 : 3

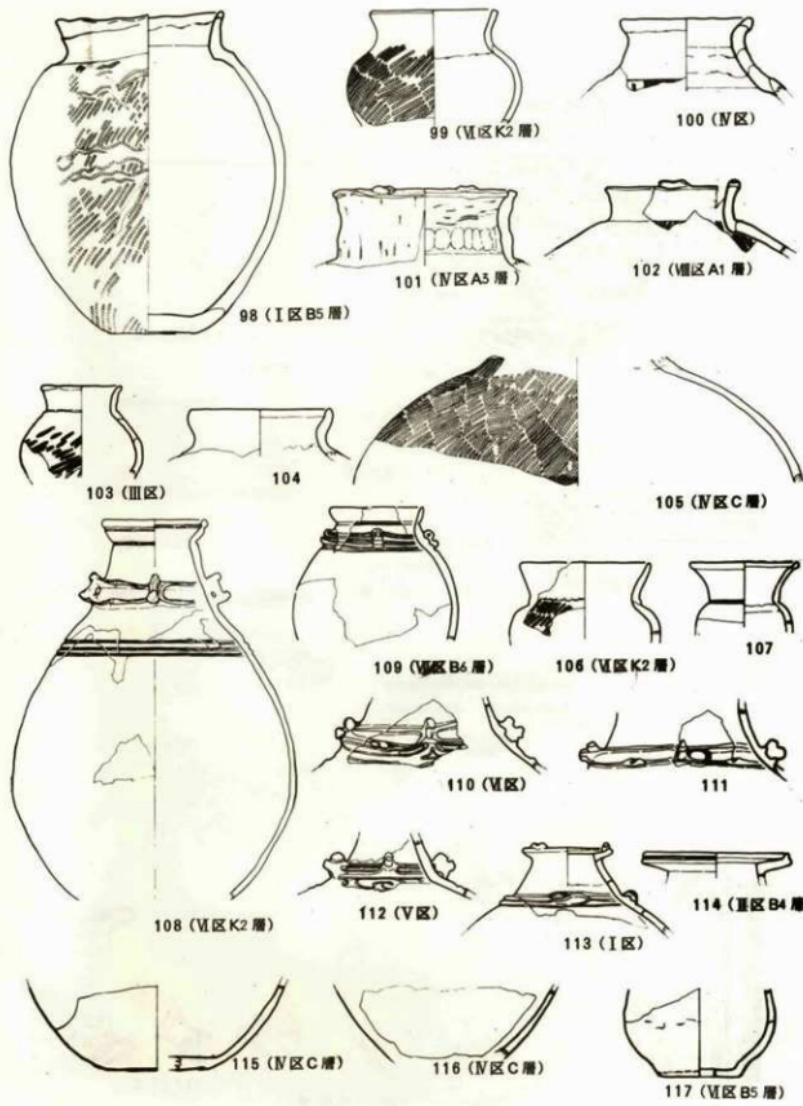
第11図 土器実測図（7） 壺型一



97 (VI区B6層)

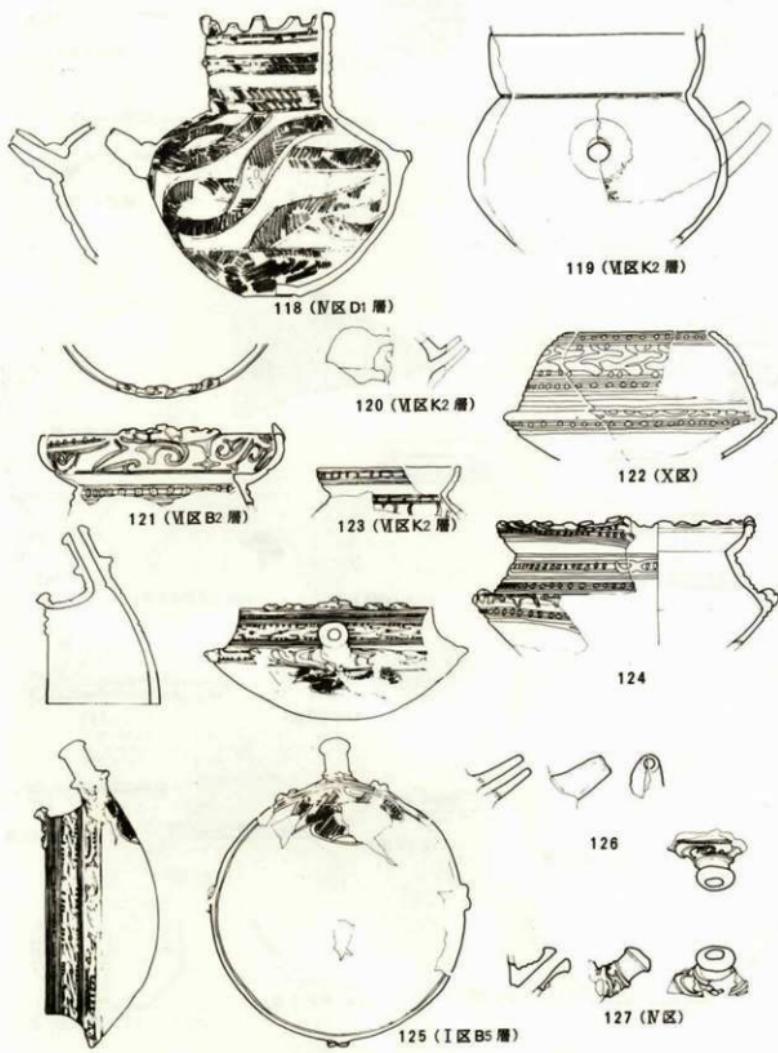


第12図 土器実測図 (8) 壺型—2

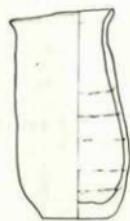


1 : 3

第13図 土器実測図 (9) 壱—3



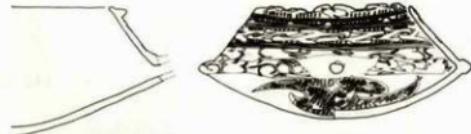
第14図 土器実測図 (10) 注口土器—1



129 (III区B6層)



130 (IV区B4層)



128 (VII区B6層)



132 (I区)



131 (I区)



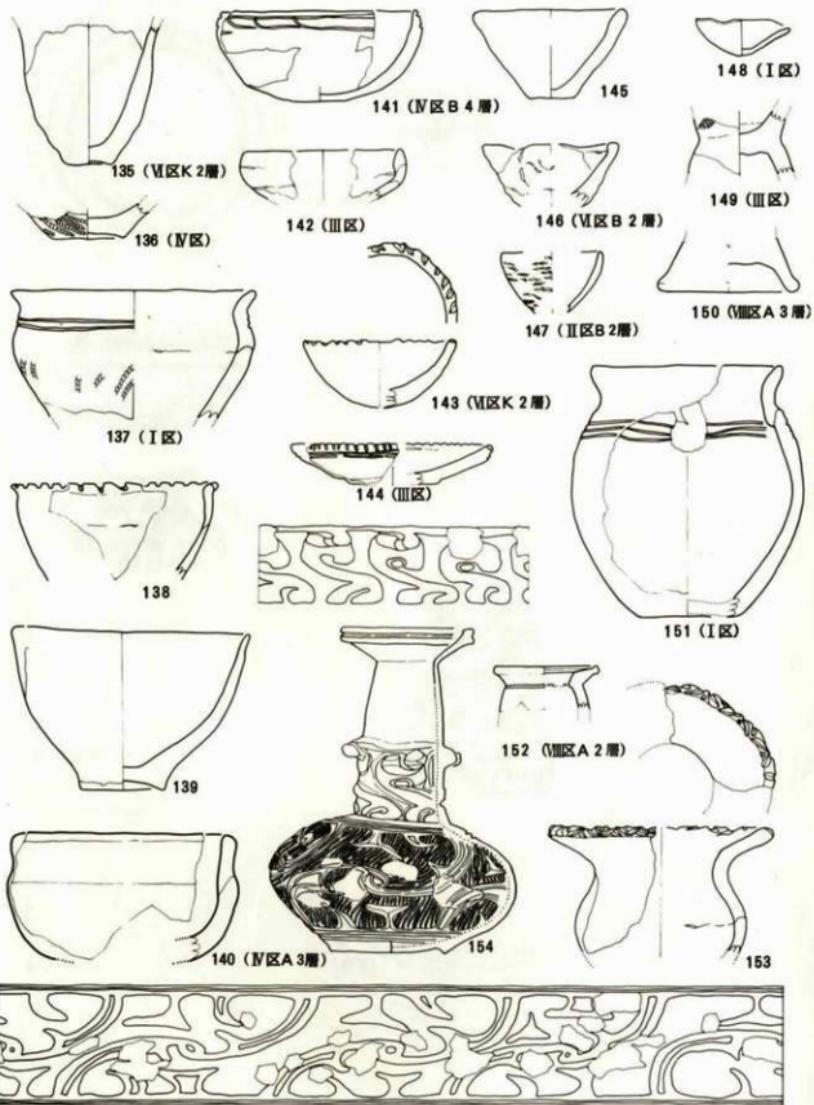
133  
(II区B2層)



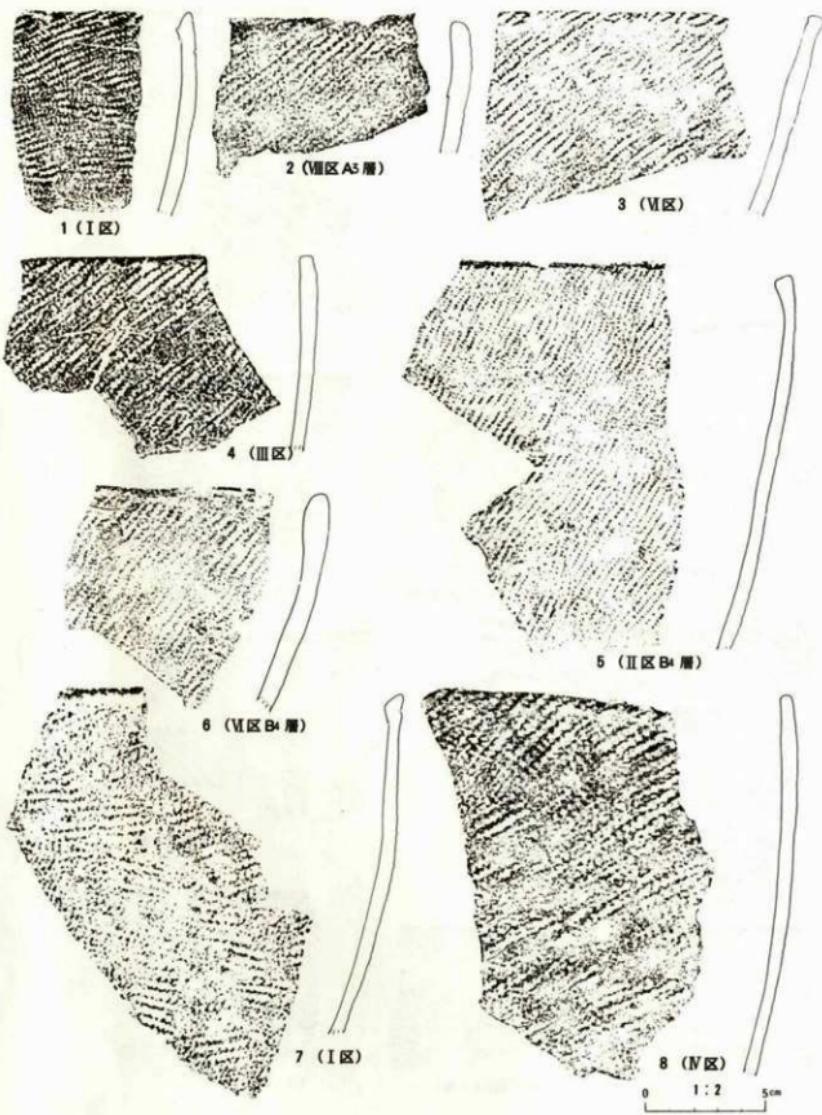
134  
(IV区)

1 : 3

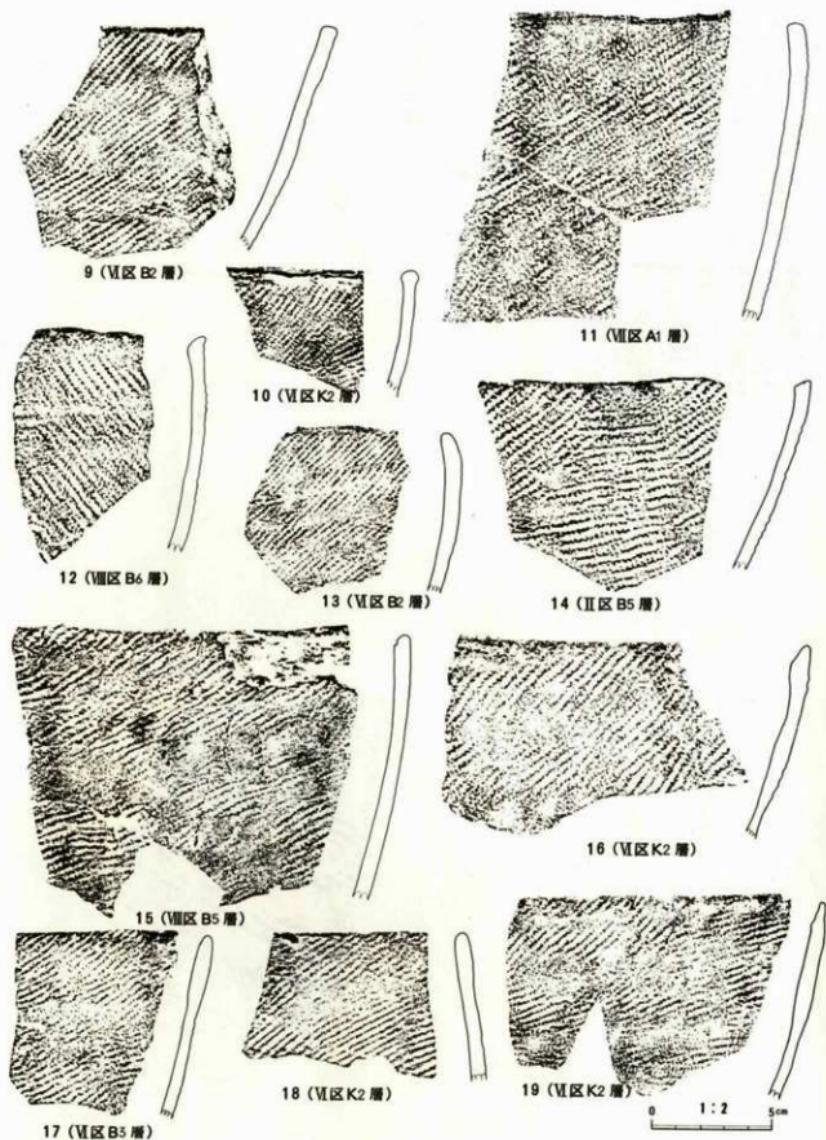
第15図 土器実測図 (11) 注口土器—2, その他の土器



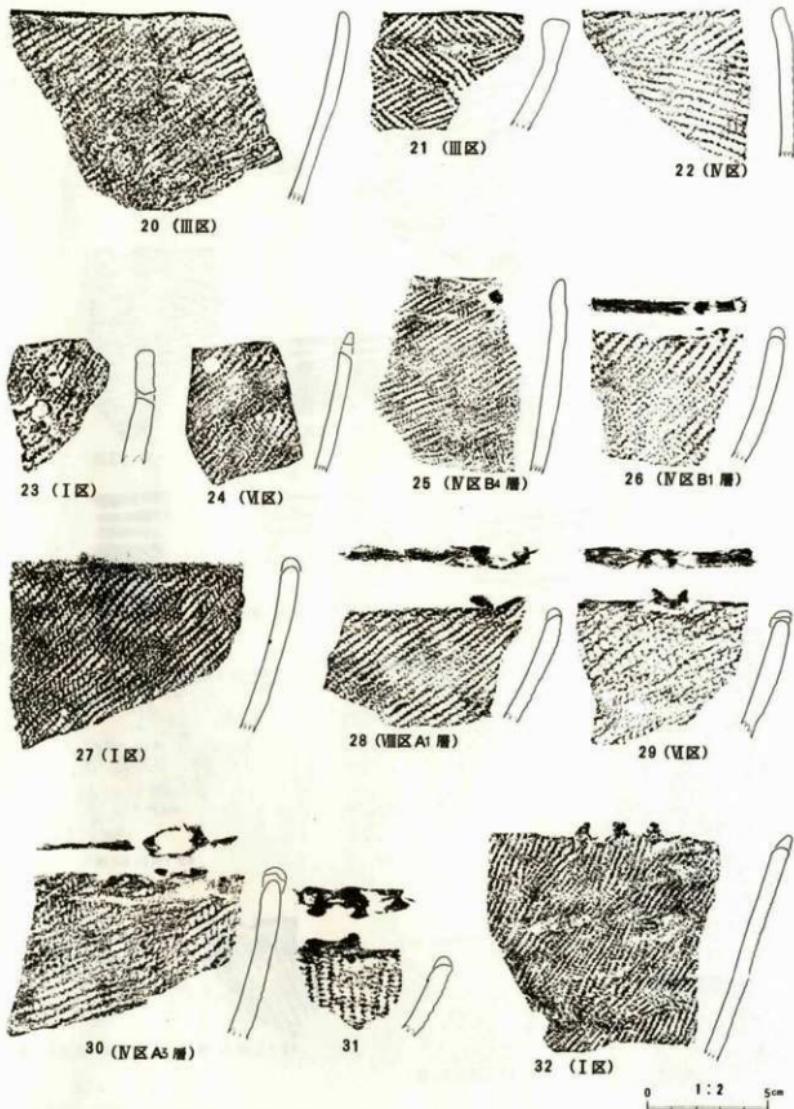
第16図 土器実測図 (12) ミニチュア土器



第17図 土器拓影図 (1)



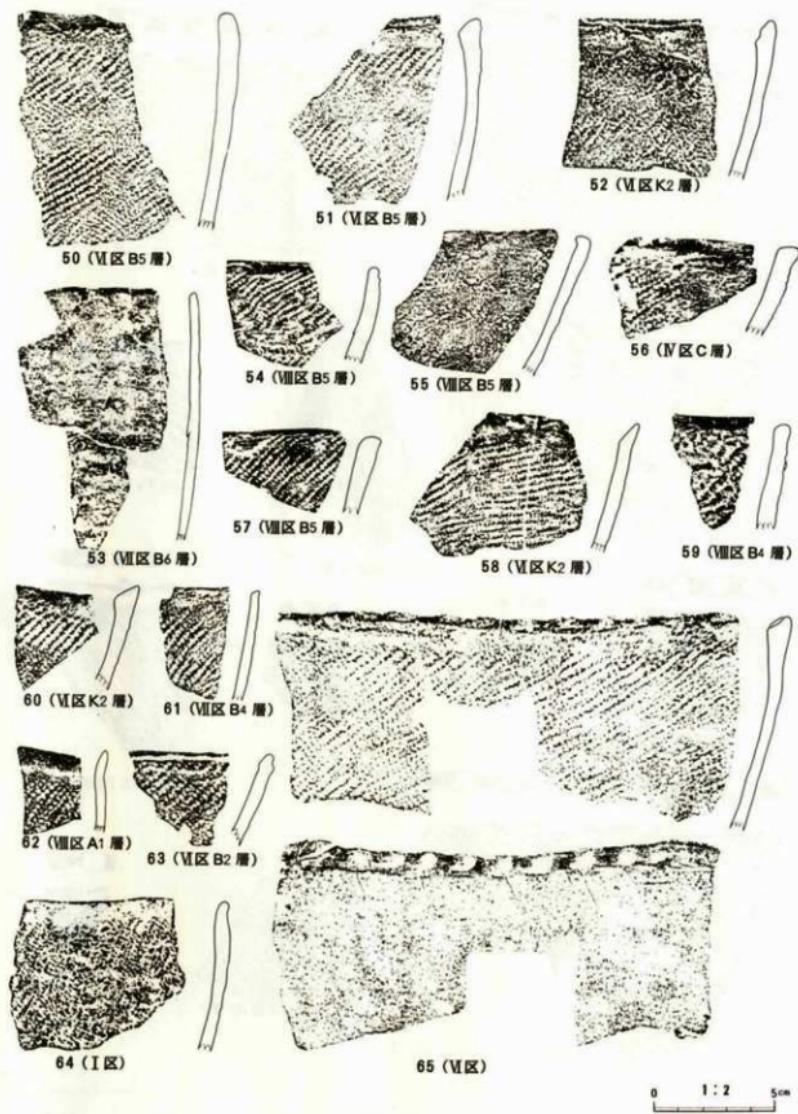
第18図 土器拓影図 (2)



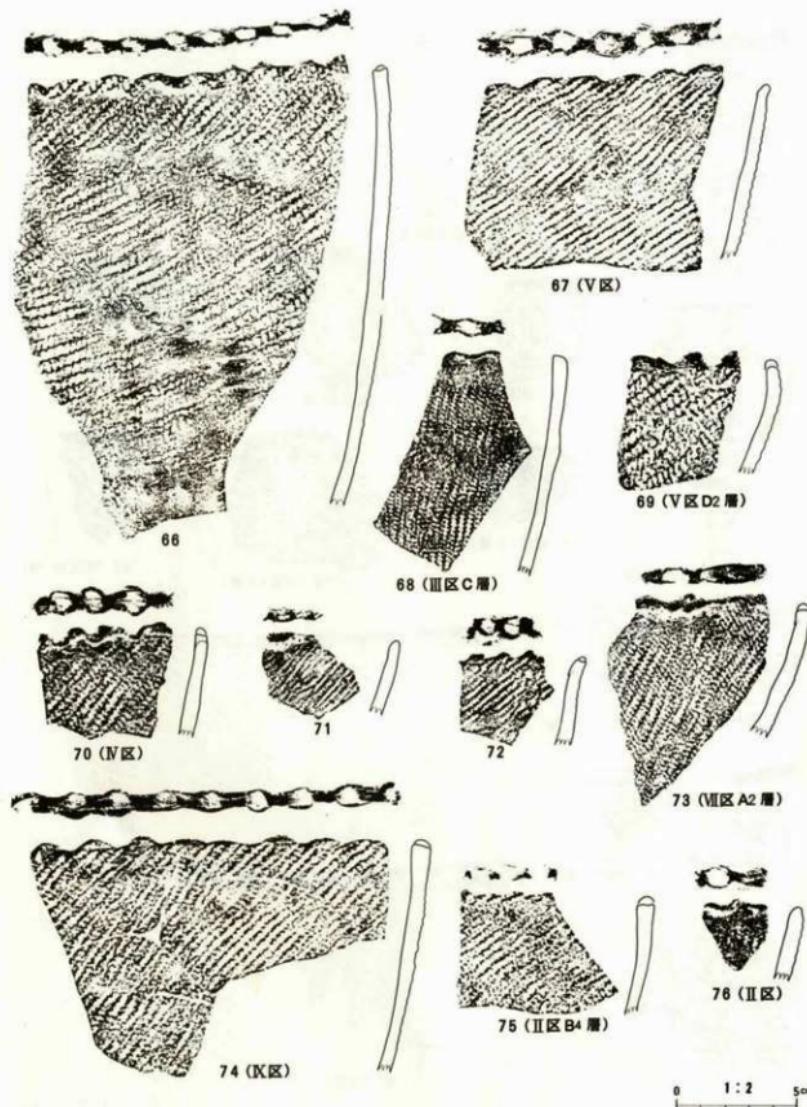
第19図 土器拓影図 (3)



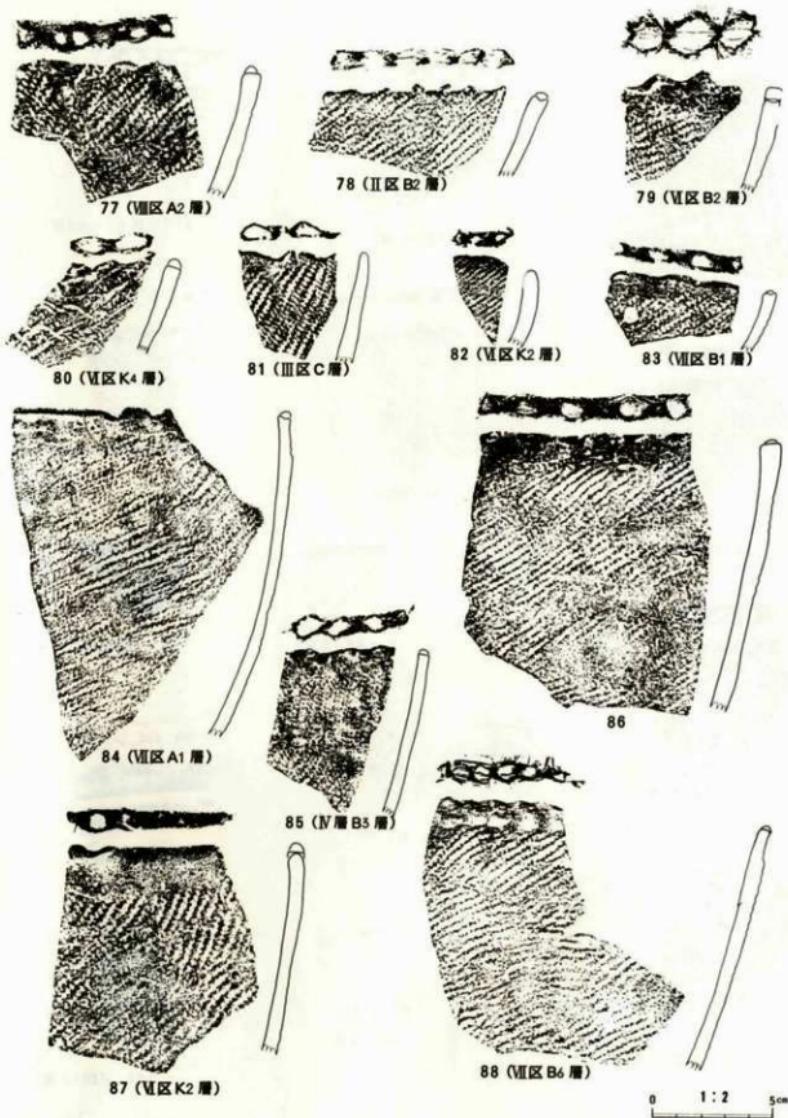
第20図 土器拓影図 (4)



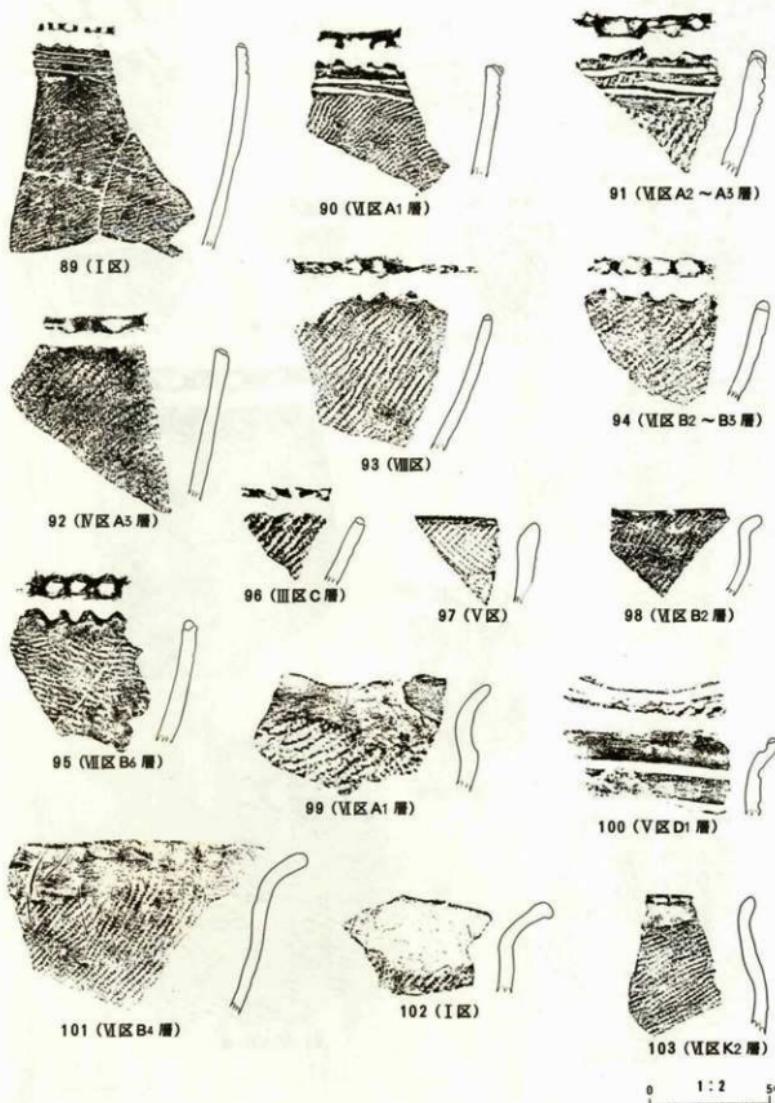
第21図 土器拓影図 (5)



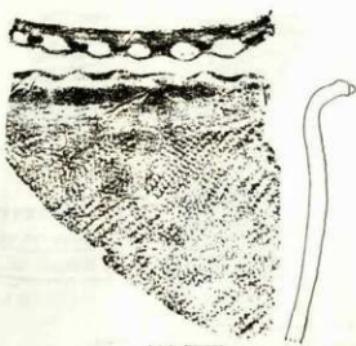
第22図 土器拓影図 (6)



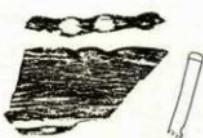
第23図 土器拓影図 (7)



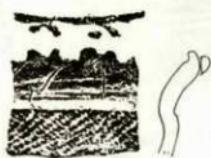
第24図 土器拓影図 (8)



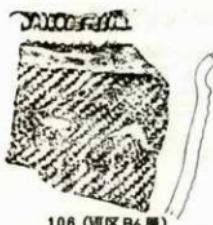
104 (VI区)



105 (VI区 K2層)



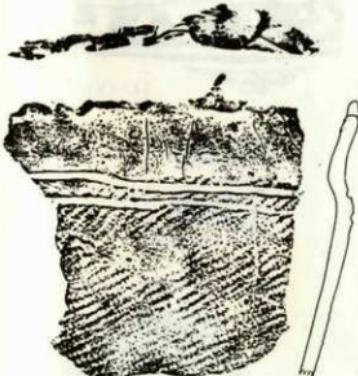
107 (I区)



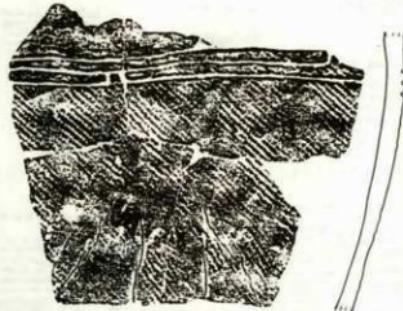
106 (VI区 B6層)



109 (V区)



108 (VI区 A2層)



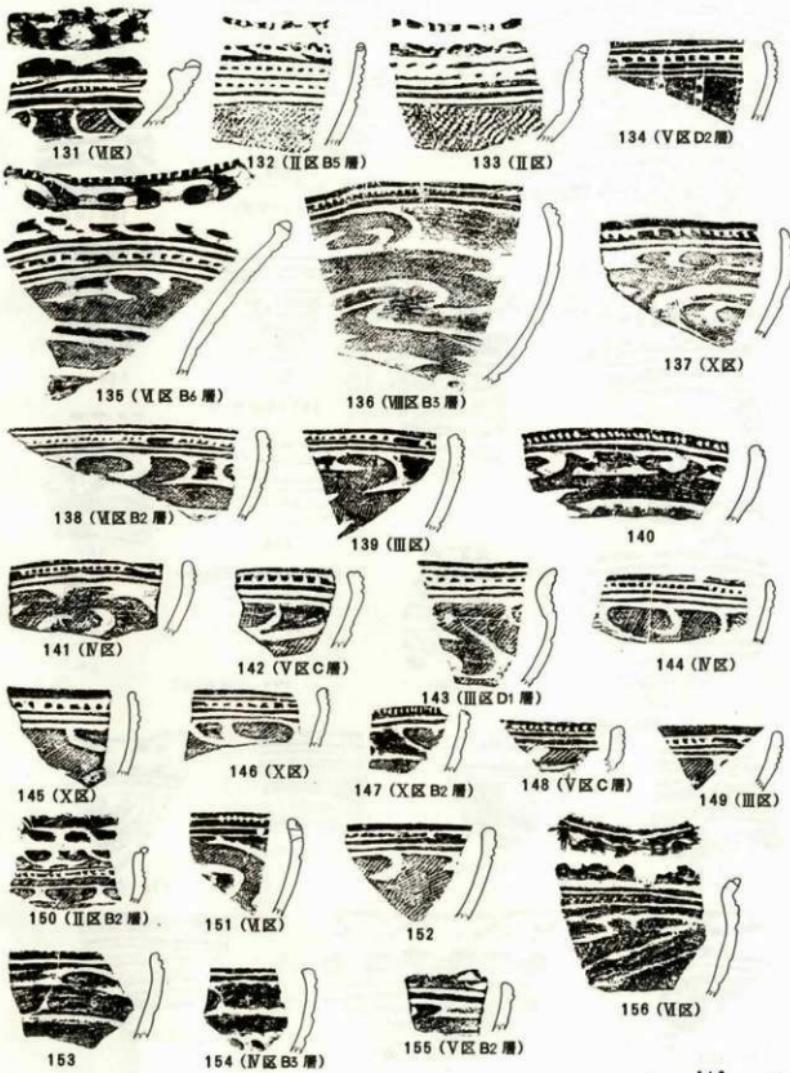
110 (V区)

0 1:2 5cm

第25図 土器拓影図 (9)



第26図 土器拓影図 (10)



0 1:2 5cm

第27図 土器拓影図 (11)



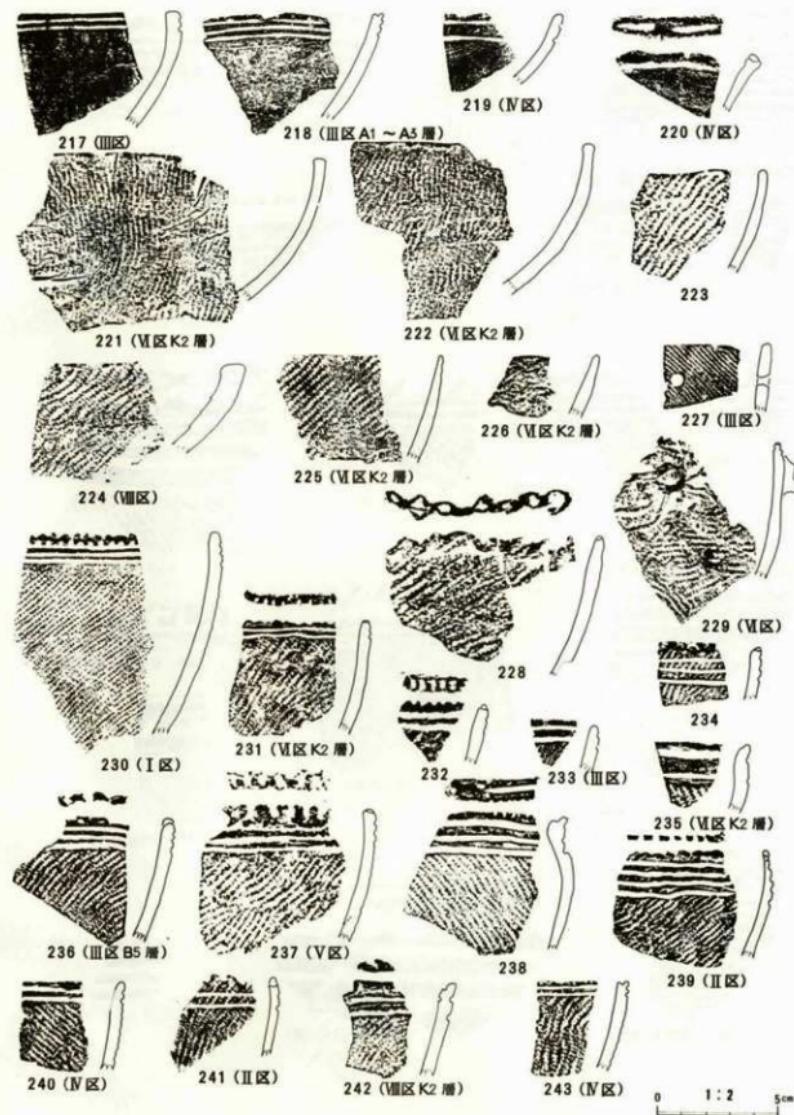
第28図 土器拓影図 (12)



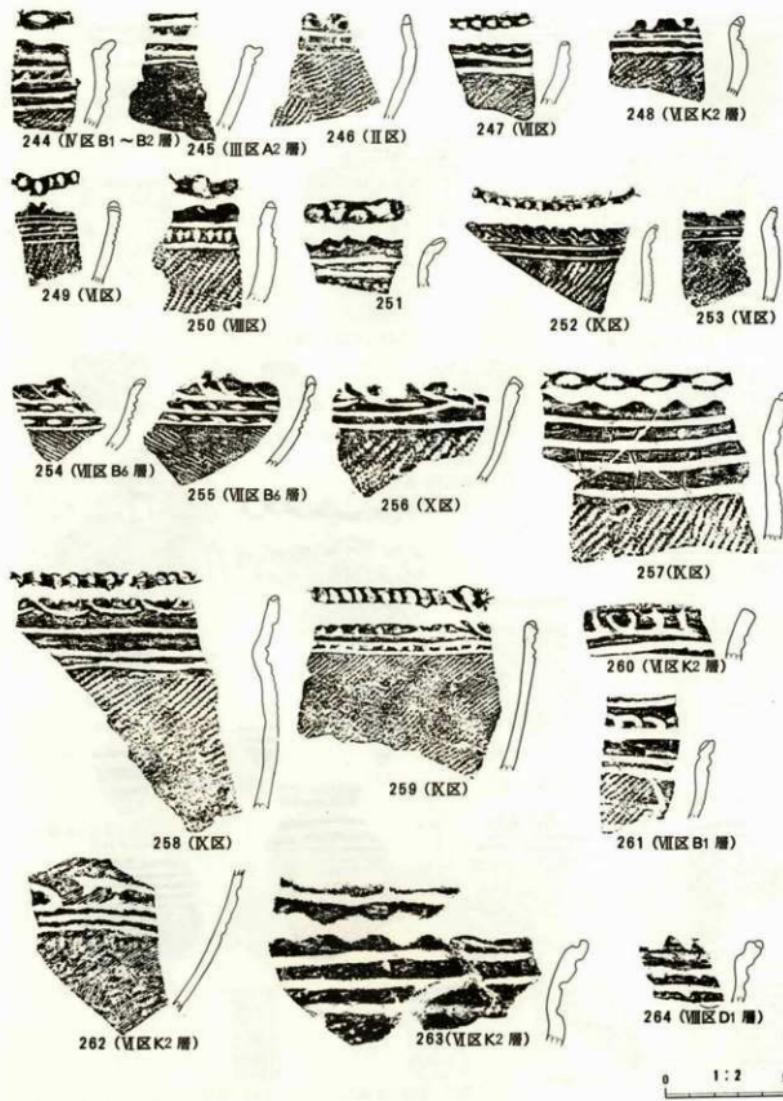
第29図 土器拓影図 (13)



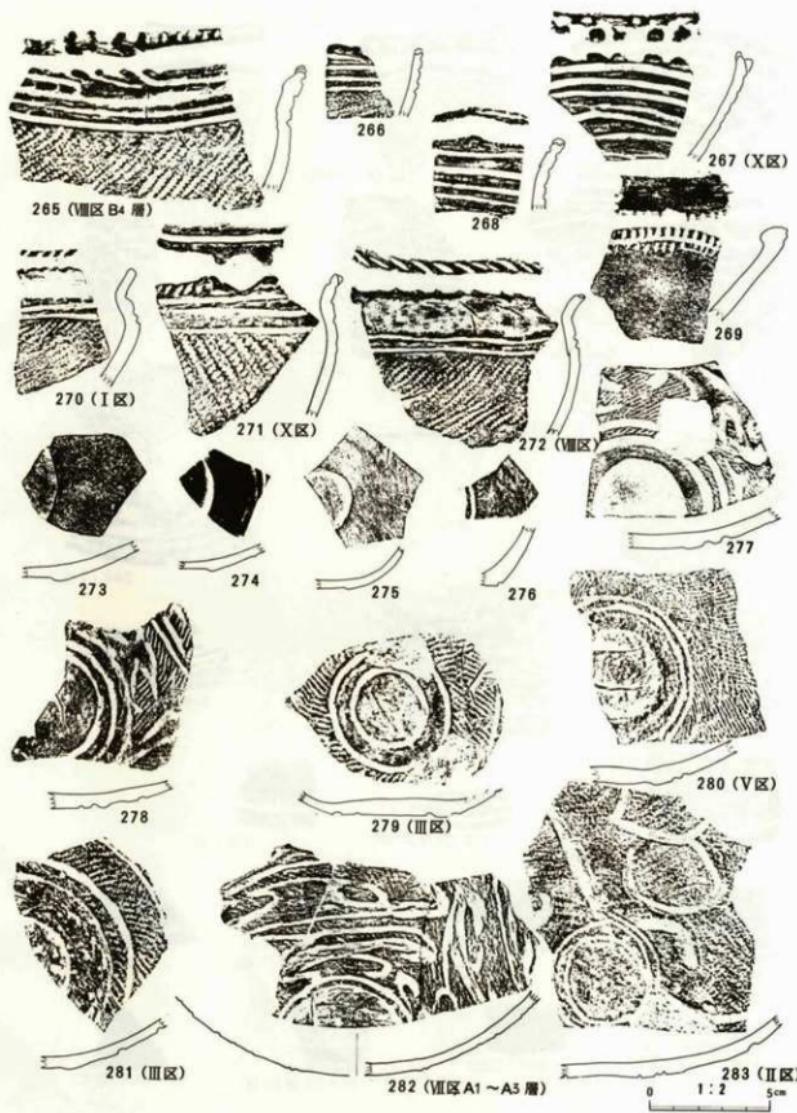
第30図 土器拓影図 (14)



第31図 土器拓影図 (15)



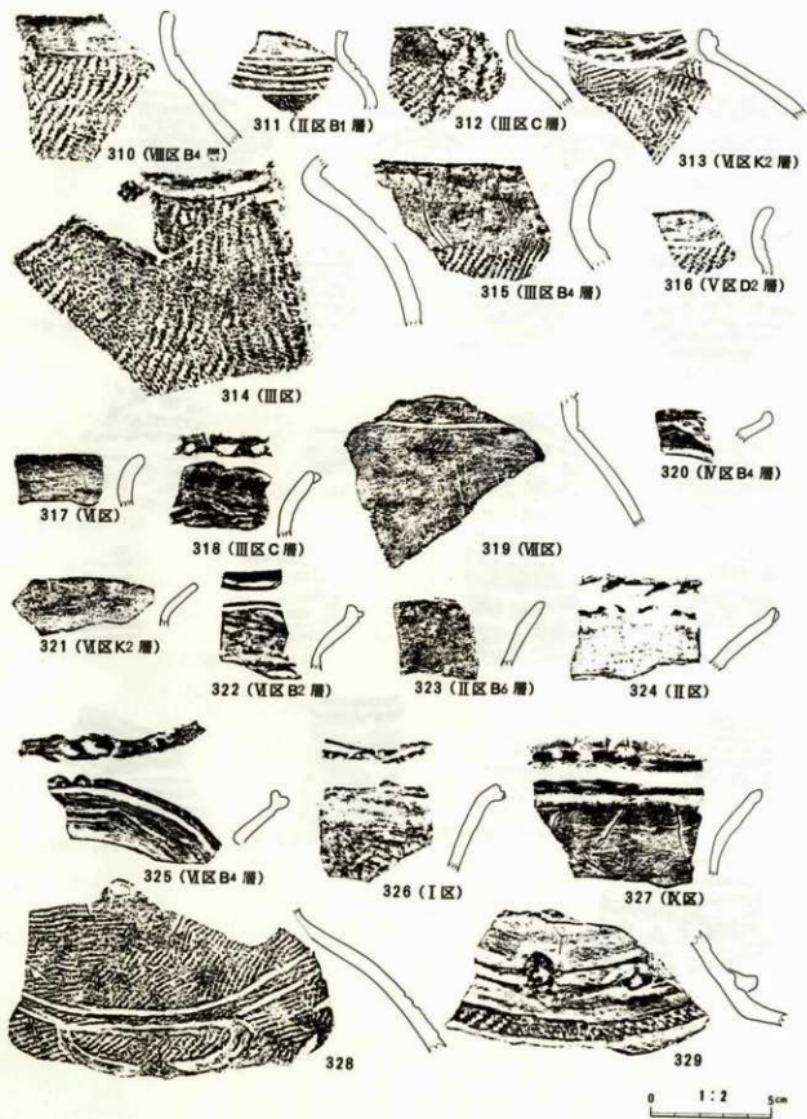
第32図 土器拓影図 (16)



第33図 土器拓影図 (17)



第34図 土器拓影図 (18)



第35図 土器拓影図 (19)



第36図 土器拓影図 (20)

## 第2節 土 製 品

土製品は、土偶・土製円板・円環状（内面渦巻状）土製品・土板などが出土している。土製円盤を除いていずれも欠損品である。その内訳は、中空土偶3・中実土偶2・無孔土製円盤3・有孔土製円盤1・円環状土製品1・土板1・不明1の総計12点である。これらの出土地点は、表採や出土層不明のものを除くと、焼土ブロックのあるV区からW区のB層が比較的多い。その所属時期については、土層が時期・型式的に明確に対応しないため判然としないが、晚期前半（特に大洞B-C式期から同C-I式期）のものがほとんどである。

以下に、土偶・円環状土製品・土板・土製円板・不明なものについて概述する。

### A. 土 偶 （第17図1～5）

今回の調査で出土した土偶は4点である。他の1点は、本調査以前に本調査区内で表採されたものである。出土した土偶はいずれも欠損品であり、相互に接合しない。遮光器形中空土偶のものと思われるものが3点で、中実土偶のものが1点、中実の動物形のものと思われるものが1点である。

1は中空の遮光器形土偶の頭部である。頭頂部が偏円形乃至隅丸方形にあいている。冠状の頭頂部は、2ヶ一対の大突起4とその間に付される2ヶ一対の小突起4によって飾られる。その直下には短いきざみがつけられる。冠状の頭頂と頭部との境は研磨される。頭部背面は、上位に短いきざみによる凸部が表出され、それ以下には長いきざみが曲線的に施される。顔面（頭部正面）に遮光器形といわれる大きな目がつくられ、その間には上向きの鼻と口・あごが、両側には耳がつけられる。外面は入念に研磨され、内面もナデ・ミガキにより丁寧に調整される。内面には頭頂部成形の際の接ぎ目の跡が観察される。目のまわりとあごそれに背面下部に単節RL縫位の繩文が若干残る。全体に朱彩が施されてあったものと思われ、目の部分や背面に部分的に残存する。

2は、中空土偶の左肩部背面の破片である。背中の上部から肩部上半のものであるが、この部分より推定すると、全体形は体高20cm位の大形の遮光器形土偶になるものと思われる。背中の左側から肩部に2つに枝分れする隆帯上には、円形の刺突が列点状に施される。隆帯の間と上下の境は丁寧にケズリ・研磨される。隆帯から上方と体部寄りには磨消繩文が施文され、隆帯直下には刻み目帯が付される。内面は横方向のナデ乃至ミガキである。朱彩が施されてあった可能性が高い。

3は、中空遮光器形土偶の左目部分の欠損品である。目の左端から耳の下を通る貫通孔がつけられている。朱彩が施されてあったものと思われ、部分的に残存している。内面は黒色処理化されており、多方向へのナデ乃至ミガキにより調整されている。

4は、中実土偶の左胸部から左手部分のものである。器面は入念に研磨され、三叉文あるいは渦巻文風の沈線文が施文される。

5は、頭部と両腕部が欠失している中実土偶である。文様は施文されておらず、全面がよく研磨されている。下端部中央から体部上半（胸部）に向って、串刺しにしたように貫通孔が穿たれている。火熱を受けたものと思われ、器面上に煤様のものが付着している。表面の胸部と下端部及び背面のはとんどが黒色化している。足にあたる部位は無いが、一見してモグラ等の動物を模したもののように見える。この点では動物形土偶（土製品）とすべきものかもしれない。

#### B、円環状土製品（第17図6）

一点のみの出土である。欠損品であるが、完形品の約程度の現存と思われる。本製品は、研究者によつて「内面渦状土製品」・「渦巻形土器」あるいは「イモ貝製品を模した土製品」等と呼ばれてゐるものに相当しよう。器形は、平面形がほぼ円形で中央から周縁部に向つて内湾するものである。裏（外）面は無文で、ケズリ後ナデ乃至ミガキにより仕上げられている。表（内）面には環状の隆帯部と凹部分がつくりだされる。器面はケズリ後ナデ乃至ミガキで調整される。現存のものでは隆帯部が等間隔の環状に見えるが、全体形は渦巻状によるものと思われる。渦巻の方向は右巻（時計回り）のように見えるが判然としない。直径の推定復元値は4.9cmであるが、長径・短径も概ね5cm前後となる。器高は約1.5cmで厚さは0.3~0.6cmである。本製品は、Ⅲ区C層から鉢（第7図27）とともに出土したものである。

#### C、土板（第17図7）

これも一点のみの出土である。平面形は梢円形乃至鷹丸方形になるものと思われる。外面は、中央に正中線と思われるものが、刺突状の刻みとともに配される。その上端には貫通しない孔をもつ。最上部には突起状のものが付いていたと思われるが、剥落している。その周りに沈線が円形に残る。他の器面上には、S字状・弧線状の沈線文が施文される。外面はナデあるいはやや雑なミガキにより、内面は縱方向のナデにより調整されている。

#### D、土製円盤（第17図8~11）

今回の調査では、有孔のものが1点、無孔のものが3点の計4点が出土している。全て縄文土器の体部片を利用したものである。

8は、有孔の土製円盤で、長径が3.9cm・重量が7.9gである。表面の縄文は単節RLである。孔は両側から穿孔されており、全周が研磨されている。

9は、無孔のもので、長径が4.3cm・重量は15.2gである。縄文はやや粗い単節RLである。これも研磨されている。

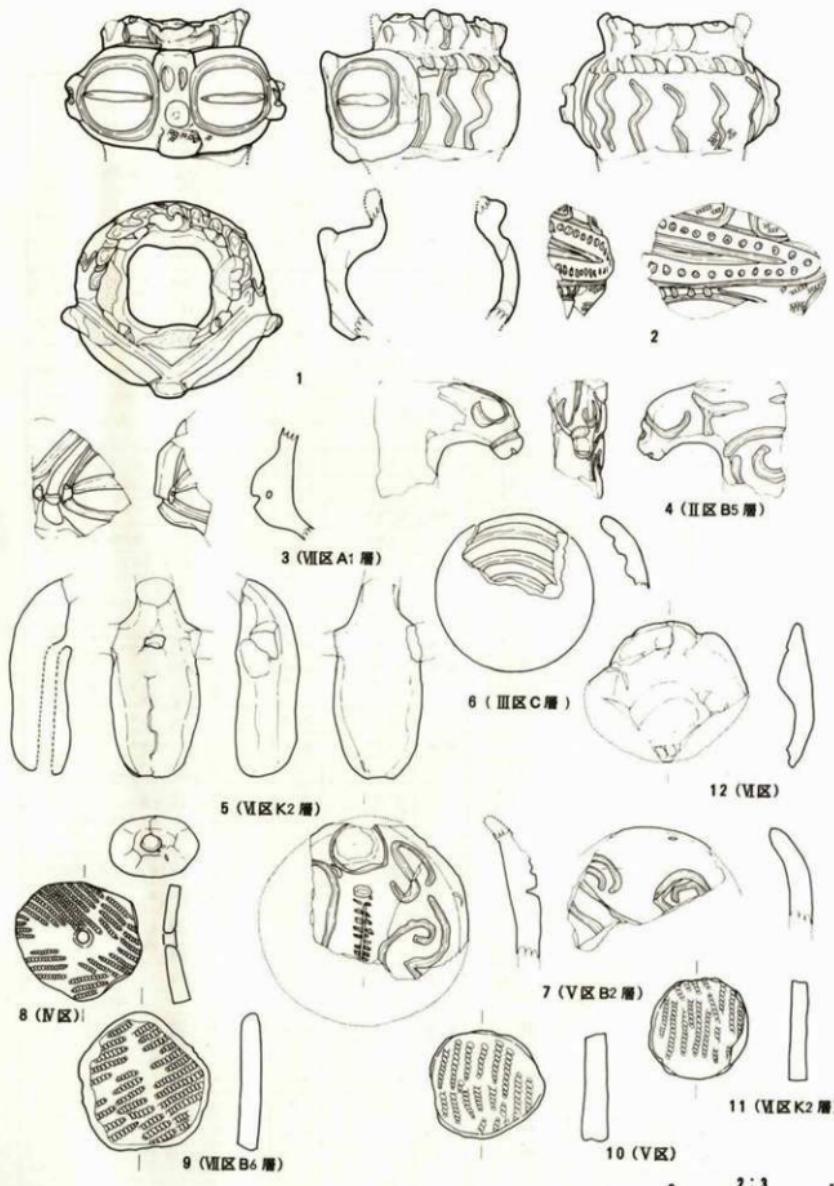
10は、無孔のもので、長径が3.6cm・重量は12.1gである。単節LR縄文で、全周が研磨される。

11は、無孔のもので、長径が3.1cm・重量は7.1gである。単節LR縄文で、全周が研磨される。

これら4点の土製円盤を計測値からみると、最大のものが9で最も重く、最小のものが11で最も軽い。これらは、大きさが3~5cmで、重さが7~16gである。

#### E、不明のもの（第7図12）

1点のみの出土で、破片であり全体形は不明である。手捏ね様の成形で、外（表）面中央が強く凹み断面形は弓なりに内湾する。中央凹部は指頭により成形したものと思われる。外面は不定方向のナデで調整されるが、内（裏）面は剥落が著しく不明である。



第37図 土製品実測図（1）

# 実測土器一覧表

(内は復元推定値)

番号	器種	出土位置	法 量(cm)		色調 (上段 下段 外側 内側)	粒度 度	土 物	施成	固 化	備 考
			口径	底径						
1	深鉢	—	(26.3)	—	—	10YR 5/2 7.5YR 5/2	中中密	B,C,E,F	良	第5回—1 内・外 燐付着
2	—	I区	(29.0)	—	—	10YR 5/2 —	—	B,C,E,F,G	—	— 2 内面 ナデ
3	—	V区K2層	25.7	—	—	10YR 5/2 —	—	B,C,E,F,G	—	— 3 外面 2次焼成黒色化 内面 ナデ
4	—	W区B6層	(15.8)	—	—	10YR 5/2	粗	B,C,E,F,G,I	中や良	— 4 内面 ナデ
5	—	—	(9.6)	—	—	7.5YR 5/2 —	密	C,G,I	良	— 5
6	—	—	(12.4)	—	—	7.5YR 5/2 —	—	C,E	不 良	— 6 内面 燐付着
7	—	—	(18.2)	—	—	7.5YR 5/2 —	中中密	B,C,E,F	中や良	— 7 内面 ナデ ケズリ (?)
8	—	V区K2層	(16.2)	—	—	7.5YR 5/2 —	密	C	—	— 8 内・外 ナデ
9	—	II区B4層	—	7.6	—	7.5YR 5/2 —	中中密	C,E,F,G	良	— 9 内面 ナデ 底部に焼成時の塊状有
10	—	V区B5層	(27.6)	—	—	10YR 5/2 —	—	A,B,C,E,F	—	第6回—10 内面 ナデ
11	—	V区D1層	—	10.6	—	10YR 5/2 —	粗	B,C	不 良	— 11 —
12	—	W区K2層	—	7.3	—	7.5YR 5/2 —	中中密	B,C,E,F,G	良	— 12 —
13	—	W区	—	5.7	—	10YR 5/2 —	—	C,E,F	—	— 13 —
14	—	III区B6層	—	6.0	—	10YR 5/2 —	密	C,E,F	中や良	— 14 —
15	—	III区C層	—	(7.8)	—	7.5YR 5/2 —	—	B,C,E,F	良 好	— 15 内・外 ミガキ
16	—	W区K2層	—	5.3	—	10YR 5/2 —	中中密	B,C,E,F	中や良	— 16 内面 ナデ
17	—	—	—	6.2	—	7.5YR 5/2 —	—	C,E,F,G	良	— 17 — 厚く燐付着
18	—	W区	—	4.4	—	7.5YR 5/2 —	密	B,C,E,F	良 好	— 18 内・外 ミガキ
19	—	—	—	丸底	—	10YR 5/2 —	中中密	B,C,E,F	中や良	— 19 内面 ナデ
20	—	W区	—	(7.0)	—	10YR 5/2 —	—	B,C,E,F	—	— 20 —
21	鉢	V区K2層	(22.0)	—	—	10YR 5/2 —	精 織	D,E,F	良 好	— 21 内面 放射状のミガキ 彩文有 外周 口部底部朱塗
22	—	V区	—	—	(5.5)	7.5YR 5/2 —	粗 織	D,F,G	良 好	— 22 内面 ミガキ 彩文有 外周 朱塗
23	—	W区B2層	—	—	—	10YR 5/2 —	密	D,E,F,G	—	— 23 内面 ミガキ 彩文有 外周 研磨
24	—	—	(11.4)	—	(6.0)	10YR 5/2 —	—	C,E,F,G	中や良	第7回—24 内面 ミガキ
25	—	—	(10.7)	—	(2.8)	10YR 5/2 —	精 織	D,E,F,I	良 好	— 25 内・外 朱塗
26	—	深鉢	—	5.4	(4.6)	7.5YR 5/2 —	—	D,E,F	—	— 26 内面 ミガキ 全体的に燐付着
27	—	M区C層	—	4.9	(2.2)	10YR 5/2 7.5YR 5/2	—	D,E,P	—	— 27 内面 ミガキ 外周 研磨
28	—	III区C層	19.5	3.7	11.1	10YR 5/2 —	—	D,E,F	—	— 28 内面 横にミガキ後放射状ミガキ
29	—	X区	(21.6)	—	(10.9)	7.5YR 5/2 —	—	D,E,F	—	— 29 上縁部内面にツール状の工具跡
30	—	M区K2層	(11.0)	4.2	(5.8)	7.5YR 5/2 —	—	D,E,F	—	— 30 内面 番号 丸底内面 外周 丸底内面 2対有
31	—	W区	—	4.2	—	朱塗 —	—	C,E,G	—	— 31 内・外 全周朱塗
32	—	V区D1層	13.2	3.8	5.0	10YR 5/2 —	—	D,E,F,G	—	— 32 内面 ミガキ 黒色處理 外周 朱塗 亂剥落
33	—	III区B4層	(23.6)	—	(6.9)	10YR 5/2 —	—	C,E,G	—	— 33 内面 黒色處理 横方向へのミガキ
34	—	—	(7.6)	—	(4.8)	10YR 5/2 —	密	C,E,F,G	良	— 34 内面 ナデ
35	—	W区	(7.9)	—	(3.8)	10YR 5/2 —	—	C,E,F,G	—	— 35 — 縦縞模様
36	—	W区K2層	—	(3.0)	—	朱塗 10YR 5/2 —	精 織	D,E,F,G	良 好	— 36 内面 ミガキ 黒色處理 外周 朱塗 亂剥落
37	—	W区B4層	—	4.5	—	7.5YR 5/2 —	密	C,E	良	— 37 内面 ミガキ 縦方向へのミガキ
38	—	W区	(8.6)	—	(3.7)	7.5YR 5/2 —	中中密	B,C,E,F,G	中や良	— 38 内面 ナデ 外周 ミガキ
39	—	I区	—	3.5	—	10YR 5/2 —	密	C,E,F,G	—	— 39 —
40	—	W区K2層	(16.3)	—	(8.1)	朱塗 —	精 織	D	良 好	— 40 内・外 黒色處理後朱塗
41	—	V区B2層	(15.0)	—	(4.2)	10YR 5/2 —	—	D,E,F	—	— 41 内面 放射状ミガキ 外周 ミガキ
42	—	W区	(8.1)	—	(4.7)	朱塗 —	—	C,E,F	—	— 42 内・外 朱塗

# 実測土器一覧表

( ) 内は復元測定値

番号	器種	出土位置	法 量(cm)		色調 (上段 下段 外面 内面)	粒 度	含 有 物	焼 成	固 化	備 考
			口径	底深						
43	縦	I区	(8.8)	3.8	4.4 10YR 5/2 5/2	密	C,E,F,I	良 好	第8回-43	内・外 ナデ
44	+	V区	(6.6)	-	(5.7) 7.5YR 5/2 5/2	中密	B,C,E,F,G,I	良	x -44	内面 ナデ 内面 瓦片付近に焼付着
45	+	V区	-	4.7	-	10YR 5/2 5/2	-	C,E,F,I	-	x -45
46	+	IV区BII期	-	5.0	-	7.5YR 5/2 5/2	密	B,C,E,F,I	良 好	x -46 内面 ナデ
47	+	V区	(7.7)	-	(5.0) 10YR 5/2 5/2	-	C,E,F,G	良	x -47	-
48	+	IV区BII期	(9.9)	5.0	8.2	10YR 5/2 5/2	-	C,E,F,G	x -48	-
49	+	II区C期	10.0	-	-	10YR 5/2 5/2	中密	C,E,F	中・良	x -49
50	+	II区	-	3.1	-	10YR 5/2 5/2	-	B,C,E,F,G,H	良	x -50
51	+	X区	10.2	-	(5.3) 7.5YR 5/2 5/2	-	C,E,F,I	不 良	x -51	-
52	+	-	(13.2)	-	(10.4) 7.5YR 5/2 5/2	密	C,E,F,G	中・良	x -52	表面磨滅跡有
53	+	II区BII期	-	5.5	-	10YR 5/2 5/2	-	C,E,F,G,I	良	x -53
54	+	V区	(7.9)	-	-	10YR 5/2 5/2	-	C,E,F,G	良 好	x -54
55	+	IV区A3期	(21.1)	-	-	7.5YR 5/2 5/2	-	B,C,E,F	-	x -55 内面 ミガキ 円形状剥離痕
56	+	III区	10.0	-	(8.2) 7.5YR 5/2 5/2	-	C,E,F	良	x -56	内面 ミガキ 内・外焼付着
57	+	I区	-	2.8	-	10YR 5/2 5/2	中密	C,E,F,G	中・良	x -57 内面 ナデ
58	+	III区B4期	(9.3)	-	-	10YR 5/2 5/2	-	C,E,F	-	x -58
59	+	VI区K2期	(12.1)	-	(7.2) 7.5YR 5/2 5/2	精 織	C,E,F	良 好	x -59	内面 ミガキ
60	台付林	X区	横円	-	-	10YR 5/2 5/2	-	D,E,F,G,I	-	第9回-60 半円形の横円を呈する 内面 1万年
61	+	II区B5期	-	-	-	7.5YR 5/2 5/2	-	D,E,F	-	x -61 体部内部及び底部内面失光 体部内面黒色處理 台面にスカシ有
62	+	IV区B6期	(22.9)	10.3	10.7	7.5YR 5/2 5/2	密	C,E,F,G	-	x -62 内面 ミガキ 中やわらか感消褪
63	+	IV区B5期	8.8	6.5	8.0	10YR 5/2 5/2	-	C,E,F,G	良	x -63 体部内部・外壁付着 内・外ミガキ 台面内面 -
64	+	I区	-	5.0	-	7.5YR 5/2 5/2	-	C,E,F,I	-	x -64 小形 内面 ミガキ
65	+	-	-	-	-	7.5YR 5/2 5/2	精 織	C,E,F	良 好	x -65 内面 ミガキ (人骨) 台面内面 2次焼成(黒化)
66	台・脚部	IV区B4期	-	9.0	-	10YR 5/2 5/2	-	D,E,F,G	-	x -66 台面内面 底面内面黒色處理 タール状付着物 台面内面 - 再利用 (?)
67	+	V区	-	7.3	-	7.5YR 5/2 5/2	中密	C,E,F	良	x -67 台面内面 手捏ね様
68	+	-	-	(6.8)	-	7.5YR 5/2 5/2	密	C,E,F	中・良	x -68 内面 ミガキ
69	+	III区	-	5.0	-	7.5YR 5/2 5/2	中密	B,C,F	-	x -69 内面 手捏ね様
70	+	-	-	4.3	-	7.5YR 5/2 5/2	精 織	D,E,F	良 好	x -70 内・外面 ミガキ 内外朱塗
71	+	X区	-	7.1	-	7.5YR 5/2 5/2	密	C,E,F,I	良	x -71 外面 ミガキ
72	+	VII区B6期	-	8.1	-	7.5YR 5/2 5/2	中密	B,C,E,F,I	中・良	x -72 内・外面 手捏ね様
73	+	X区	-	7.1	-	7.5YR 5/2 5/2	-	B,C,E,F,G,I	良	x -73 外面 ナデ
74	+	VI区K2期	-	7.0	-	7.5YR 5/2 5/2	-	B,C,E,F,I	-	x -74 外面 ナデ
75	+	V区	-	8.1	-	7.5YR 5/2 5/2	精 織	D,E,F,G	良 好	x -75 外面 ミガキ
76	+	VI区K2期	-	(6.8)	-	10YR 5/2 5/2	粗	B,C,E,F,I	不 良	x -76 内・外面 手捏ね様
77	+	VII区D1期	-	6.0	-	10YR 5/2 5/2	-	C,F,G,H	-	x -77 -
78	+	X区	-	4.9	-	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	中密	B,C,E	中・良	x -78 外面 ミガキ
79	+	V区	-	3.6	-	10YR 5/2 5/2	-	C,I	-	x -79 内・外面 手捏ね様
80	+	X区	-	4.0	-	10YR 5/2 5/2	-	C,E,I	-	x -80 表面内面中密タール状付着物 表面 手捏ね様
81	+	-	-	6.8	-	7.5YR 5/2 5/2	-	B,C,I	-	x -81 内・外面 手捏ね様
82	+	V区	-	4.2	-	7.5YR 5/2 5/2	粗	B,C,E	不 良	x -82 -
83	+	III区	-	(6.4)	-	7.5YR 5/2 5/2	密	C,F,I	良 好	x -83 粘り付け高台状 内面 1万年
84	転用脚部	II区B6期	-	-	-	10YR 5/2 5/2	-	B,C,E,F,G,H,I	-	第10回-84 内面 ミガキ

# 実測土器一覧表

( ) 内は推定復元値

番号	器種	出土位置	基盤 口径	基盤 底厚	基盤 高さ	色調 (上段 下段 内面)	直 径	上 部 有 物	施 成	因 版	備 考
85	器	Ⅲ区B5層	(12.6)	(6.1)	2.8	7.5VR 5 7.5YR 5	粗	D,E,F,I	良 好	第1089-85	内面 ミガキ
86	-	Ⅳ区B5層	-	丸底	-	10YR 5 10YR 5	-	D,E,F	-	-86	-
87	-	Ⅲ区	(19.7)	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D,E,F	-	-87	-
88	-	Ⅲ区	(27.5)	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D,E,F,I	-	-88	-
89	-	I区B1層	8.7	3.3	1.6	10YR 5 -	粗	B,C,E,F,G,I	やや良	-89	手形ねじ 内・外面部 ミガキ
90	-	Ⅳ区A3層	-	横円	-	10YR 5 -	やや密	C,E,G	良	-90	内面 ミガキ
91	-	Ⅲ区B6層	17.2	丸底	(5.2)	10YR 5 10YR 5	密	C,E,F	良 好	-91	内・外面部 ミガキ
92	-	MIKK2層	(12.2)	-	-	7.5VR 5 10YR 5	やや密	B,C,E,F,I	良	-92	内・外面部 ミガキ
93	-	Ⅲ区B3層	10.6	丸底	3.1	10YR 5 -	-	C,E,F,H	やや良	-93	内面ナデ 著しく荒れている。
94	-	-	(17.1)	(12.9)	4.0	7.5VR 5 7.5YR 5	粗	B,C,E,F,I	-	-94	内・外面部 ミガキ
95	-	X区	17.0	10.2	4.6	7.5VR 5 7.5YR 5	やや密	B,C,E,F,I	良 好	-95	内面 ミガキ
96	器	-	-	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	粗 細	D,E,F	-	第118296	内・外面部 ミガキ 外面部朱塗
97	-	Ⅳ区B6層	-	8.0	-	7.5VR 5 5YR 5	-	D,E,F	-	第1289-97	内面 ミガキ
98	-	I区B5層	10.4	5.3	19.9	7.5VR 5 7.5YR 5	やや密	B,C,E,F,I	良	第1389-98	内面 ナデ
99	-	MIKK2層	(8.0)	-	-	10YR 5 7.5YR 5	密	C,E	-	-99	内面 ナデ
100	-	Ⅳ区	(8.2)	-	-	7.5VR 5 -	やや密	C,E	-	-100	内面 ナデ
101	-	Ⅳ区A3層	(11.4)	-	-	7.5VR 5 -	-	C,G	-	-101	内面ナデ 指跡痕
102	-	Ⅳ区A2層	(8.4)	-	-	7.5VR 5 -	-	C,E,G,I	やや良	-102	内面 ナデ
103	-	Ⅲ区	5.0	-	-	7.5VR 5 -	-	C,E,I	良	-103	内面 ナデ
104	-	-	(9.0)	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	C,E,I	-	-104	内面 ナデ
105	-	Ⅳ区C層	-	-	-	10YR 5 10YR 5	粗 細	C,E,H	良 好	-105	内面 ミガキ
106	-	Ⅳ区K2層	(8.2)	-	-	2.5YR 5 -	-	D,E,F	良	-106	内面 ナデ
107	-	-	(6.8)	-	-	7.5YR 5 -	-	D,E,F	良 好	-107	朱塗
108	-	Ⅳ区K2層	6.6	-	-	10YR 5 10YR 5	-	D,E,F	-	-108	朱塗
109	-	Ⅳ区B6層	5.6	-	-	10YR 5 10YR 5	密	C,E	やや良	-109	内面 ケズリ 強烈な手部にタル状附着物
110	-	Ⅳ区	-	-	-	10YR 5 -	粗 細	D,I	良 好	-110	朱塗
111	-	-	-	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D,I	-	-111	朱塗
112	-	Y区	-	-	-	10YR 5 -	-	D,E,I	-	-112	朱塗
113	-	I区	(5.6)	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D,E	-	-113	朱塗
114	-	Ⅱ区B4層	(9.4)	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D,F	-	-114	朱塗
115	-	Ⅳ区C層	-	(6.2)	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D	-	-115	朱塗
116	-	Ⅳ区C層	-	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D,E	良	-116	朱塗
117	-	Ⅳ区B5層	-	(5.0)	-	7.5VR 5 5YR 5	密	C,E,G,I	やや良	-117	内面 ナデ
118	注土器	Ⅳ区D1層	8.3	3.5	16.7	10YR 5 7.5YR 5	粗 細	C,E,F,G	良 好	第14図-118	内・外面部 ミガキ
119	-	MIKK2層	-	-	-	10YR 5 7.5YR 5	密	B,C,E,F,G	良	-119	内・外面部 ナデ 柱状接合部アスファルト接着
120	-	MIKK2層	-	-	-	10YR 5 7.5YR 5	-	B,C,E,F,G,I	-	-120	内・外面部 ナデ 内面 朱附着
121	-	MIKK2層	(15.0)	-	-	10YR 5 10YR 5	粗 細	D,E,F	良 好	-121	内・外面部 ミガキ
122	-	X区	(9.4)	-	-	7.5VR 5 7.5YR 5	-	D,E,F	-	-122	内・外面部 ミガキ
123	-	MIKK2層	(9.0)	-	-	10YR 5 -	-	D,E,F	-	-123	内・外面部 ミガキ
124	-	-	(16.2)	-	-	10YR 5 10YR 5	-	D,E,F	-	-124	内・外面部 ミガキ
125	-	I区B5層	12.0	丸底	7.0	10YR 5 10YR 5	-	D,E,F,G,H	-	-125	内・外面部 ミガキ
126	-	-	-	-	-	10YR 5 7.5YR 5	やや密	B,C,E,G,H	やや良	-126	外面 ナデ

# 実測土器一覧表

(内は推定復元数)

番号	器種	出土位置	底 口径 (cm)	底 厚さ (cm)	色調 (上段 下段 外側 内側)	底 度 形 状	有 物	構成	図 版	備 考
127	往口土器	新区	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	粘 土	D,E,F	良 好	第14回-127	外側 ミガキ
128	—	WKA B6層	9.6	丸底	7.0	10YR 5/2 10YR 5/2	—	D,E,F,G	—	第15回-128 内・外側 ミガキ
129	筒形土器	B区B6層	6.5	4.0	12.9	10YR 5/2 10YR 5/2	—	D,E,F,G	—	—129 筒形不整(中央凹)
130	—	I区	(7.5)	7.8	16.5	10YR 5/2 10YR 5/2	—	D,E,F,G	—	—130 —
131	—	WKA B4層	(7.8)	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	—	D,E,F	—	—131 宮底堅らむ
132	香炉形土器	I区	—	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	密	D,E,F	—	—132 ミカシ
133	片口形土器	B区B2層	—	—	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,E,F,G,H	—	片口堅 手捏ね様
134	把手付土器	新区	—	—	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,E,F	—	把手付 ミガキ
135	ミナミア土器	WKA B2層	—	(1.4)	—	2.5YR 4/2 5YR 5/2	中空	C,E,F	不 良	第16回-135 内面ナデ 表面剥落跡
136	—	新区	—	2.2	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,E,F	良	—136 内面 ミガキ
137	—	I区	(7.5)	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	—	B,C,E,F,I	—	—137 内・外・部外ナデ
138	—	—	(6.3)	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	密	C,E,F,I	良 好	—138 外側 ミガキ 内面 ナデ
139	—	—	(7.2)	2.5	4.9	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	やや密	C,E,F,G,I	良	—139 内面 ミガキ 底面附近にヒカル状付着物
140	—	WKA A3層	(6.4)	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	—	B,C,E,F,G	—	—140 内・外 手捏ね様
141	—	WKA B4層	(6.0)	(1.6)	2.9	5YR 5/2 5YR 5/2	密	C,E,F	—	—141 内面 ミガキ
142	—	III区	(4.8)	—	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,F	—	—142 内・外手捏ね様 植物根
143	—	WKA K2層	(4.6)	丸底	(2.1)	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,E,F,G,I	良 好	—143 内面 ミガキ
144	—	III区	(6.1)	(2.7)	1.3	10YR 5/2 10YR 5/2	—	C,E,F	—	—144 外側手捏ね様 2次焼成により黒化 内面 ミガキ
145	—	—	(4.5)	(1.3)	2.8	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	粘 土	C,E,F,G,I	—	—145 内・外 丁寧なミガキ
146	—	WKA B2層	(4.0)	—	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	中空	C,E,F,G,I	不 良	—146 内・外手捏ね様 器底凹凸著しい
147	—	II区B2層	(3.0)	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	粘 土	C	良 好	—147 外側 ミガキ 内面 手捏ね様
148	—	I区	2.9	底底	1.1	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	中空	C,E,F	良	—148 内・外 手捏ね様 指痕有
149	—	III区	—	—	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,E,F,G,H	やや良	—149 内・外ナデ やや難である。
150	—	WKA A3層	—	4.4	—	2.5YR 5/2 2.5YR 5/2	密	C,E,F,G	—	—150 内・外 ナデ
151	—	I区	(5.9)	(3.0)	7.6	10YR 5/2 10YR 5/2	やや密	C,E,F,G	良	—151 外側 丁寧なミガキ 内面 ミガキ
152	—	WKA Z2層	3.1	—	—	朱塗	粘 土	D	良 好	—152 内・外ミガキ 朱塗
153	—	V区	(6.7)	—	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,E,F,G,I	—	—153 内・外 ミガキ
154	—	(長縦)	—	4.0	3.6	10.1	朱塗	D	—	—154 内・外丁寧なミガキ 朱塗

# 土製品一覧表

(内は欠損品の現存数)

番号	器種	出土位置	底 径 (cm)	底 厚 (cm)	重量 (g)	色調 (上段 下段 外側 内側)	底 度 形 状	有 物	構成	図 版	備 考
1	土偶	表採	—	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	粘 土	D,F	良 好	第17回-1	中空土偶 圆筒 形部分に残存
2	—	—	—	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	—	C,E,F,G,H	—	—2	中空土偶 右肩部
3	—	WKA 1層	—	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	—	D,E,F	—	—3	中空土偶 頬部
4	—	II区B5層	—	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	密	B,C,E	—	—4	中空土偶 肩部
5	—	WKA K2層	—	—	—	10YR 5/2 10YR 5/2	—	C,E,F,G	—	—5	中空土偶 動物形 (?) 胸部から下端部への貫通孔有
6	円筒形 土製品	III区C層	(4.9)	—	—	7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	C,E,F,G,H	—	—6	外側輪郭 ティッシュホルダー
7	土 板	V区B2層	—	—	—	34.3 10YR 5/2 10YR 5/2	中空	C,E,F,G	良	—7	外側輪郭 ティッシュホルダー
8	土製円板	新区表土	3.7	3.9	0.3 0.5	7.9 7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	密	C,E,F,G	良 好	—8	内・外輪郭 部分的に残存 中央部表面から穿孔 全周研磨
9	—	WKA B6層	4.3	4.0	0.6	15.2 7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	粗	C,E,F,G	やや良	—9	全周研磨
10	—	V区表土	3.3	3.6	0.6 0.7	12.0 7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	中空	C,E,F,G	良	—10	—
11	—	WKA K2層	3.1	3.0	0.5	7.1 7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	B,C,E,F	—	—11	—
12	手捏ね 土製品	新区表土	—	—	—	14.8 7.5YR 5/2 7.5YR 5/2	—	B,C,E,F	—	—12	—

\* 土器中の含有物の欄の記号は次のものを表している。 A小標 B粗砂粒 C細砂粒 D微砂粒 E金屬母 F黒墨母 G石英 H長石 I赤色鉄

### 第3節 石 器（第38図～第47図）

今回の調査によって本遺跡より出土した石器は総数117点に及び、その内訳は、石鎌9点、石錐3点、鎌状石器1点、石匙5点、削器30点、両面調整石器13点、使用痕を有する剥片37点、楔形石器2点、石核2点、打製石斧1点、磨製石器2点、石錘1点、敲石・凹石・磨石類10点、石皿1点である。本報告書で、その全ては掲載し得なかったが、出来得たものに関して、以下触れていただきたい。

#### a、石鎌（第38図1～9）

1～4は凸基有茎石鎌である。1・2は丁寧に調整されている。3は鎌身と茎部の区分が判然としないが、凸基有茎石鎌の粗製品として捉えた。1～3は茎部にアスファルトの附着が認められる。4は丁寧に調整されているが茎部が中心からややずれている。

5は凹基有茎石鎌である。やや大形で裏面に主要剥離面を大きく残す。

6は円基石鎌である。丁寧に調整され正面基部にアスファルトの附着が認められる。

7は円基石鎌であるが、基部がやや抉入する。丁寧に調整されている。

8・9は基部が欠損する。9は裏面に主要剥離面を大きく残す。

#### b、石錐（第38図10～12）

1は頭部と錐部の区分が判然としないが、錐部は丁寧に調整され、やや短い。11は錐部が欠損しているが明瞭な頭部をもつ。12は断面ほぼ三角形の縦長剥片の先端が調整され、錐として機能した可能性をもつものである。

#### c、鎌状石器（第38図13）

鎌状石器は13の1点のみである。半面加工でやや反っている。両側縁部は直線的でほぼ平行であり、やや粗い調整が両面になされる。下端部は正面にのみ丁寧な調整がなされている。

#### d、石匙（第39図14～18）

14～16・18は横型石匙、17は縦型石匙である。14は裏面に主要剥離面を残すが二次剥離によってその占める面積は小さい。丁寧に調整され両端は鋭く尖る。つまみ部にアスファルトの附着が認められる。15は裏面に主要剥離面を大きく残す。丁寧に調整され卵形様に成形されている。つまみ部にアスファルトの附着が認められる。16は裏面に主要剥離面を大きく残す。やや丁寧に調整され、正面左上縁部はやや抉入する。18は刃部のみ残存している。丁寧に調整され、やや厚手である。17は刃部のみ残存している。やや粗い調整で、先端部にアスファルトの附着が認められる。

#### e、削器（第39図19～20、第40図21～28、第41図29～35）

19～23は刃部両面調整である。19・21は丁寧に調整されている。19は主要剥離面の打点を残す。

24～27は刃部片面調整で主要剥離面の打点を残すものである。

28～35は刃部片面調整で主要剥離面の打点を残さぬものである。

#### f、両面調整石器（第42図36～41、第43図42～46）

36・42は主要剥離面の打点を残すものである。

38～41・43～45は主要剥離面をほとんど残さぬもの、37・46は主要剥離面を大きく残すものである。

g、使用痕を有する剥片（第44図47～54、第45図55～61）

47～51は縦長剥片で打点を残すもの、53・55・57・58は縦長剥片で打点を残さぬものである。

52・60は横長剥片で打点を残すもの、54・56・59・61は横長剥片で打点を残さぬものである。54は下端部がやや調整され、石錐の機能を有していた可能性がある。

h、楔形石器（第45図62）

両極打法による階段状の細かい剥離痕が上下縁部にみられる。両側縁部からの剥離はなされていない。

i、石核（第45図63）

正面及び側面の一部に自然面を残す。上下両端を主な打面としている。

j、打製石斧（第46図64）

打製石斧は64の1点のみである。正面は自然面を大きく残し、両側縁部・刃部にやや粗い調整がなされる。裏面は主要剥離面を大きく残し、両側縁部・刃部より二次剥離がなされ、やや粗い調整がなされる。全体的に粗雑なつくりである。

k、磨製石斧（第46図65～66）

65は太形始刃を呈する。基部を欠損する。脣部両側縁部は敲打されている。66は小形で始刃を呈す。基部は整形の際の剥離面が残り、刃部は一部欠損する。

l、石錐（第46図67）

石錐は67の1点のみである。小形で偏平な円錐が利用されている。約53を欠損する。両端が剥離され抉入部がつくり出されているものと思われる。

m、敲石・凹石・磨石類（第47図68～77）

68は下端部が著しく敲打され、両側縁部・上端部に敲打痕が認められる。表面には磨痕が認められ、磨石の機能も有するものである。また正面中央部には深さ1mmにも満たないが浅い凹みが認められる。69は正面右下側縁部を残し、他の全周縁部が敲打される。両面とも5つの凹みが連なり並ぶ。70は表面が部分的に剥落している。下端部に敲打痕、両面中央部に凹みが認められる。71は下端部に剥離が集中し、敲打によるものと思われ、敲石としてとりあつかった。72は正面に大きく自然面を残す。下端部は刃部様に調整され、一部敲打痕が認められ、上端部も細かく調整され敲打痕が認められる。右側面の裏面よりの縁部は細かい調整がなされ、右側面の縁部から中央部にかけて磨耗痕が認められる。敲石としてとりあつかった。73・74は凹石である。73は両面に2ヶ所ずつ、74は正面に2ヶ所の凹みが認められる。75～77は磨石である。75は表面剥離が著しい。77は両面中央部に浅い凹みが認められる磨石である。

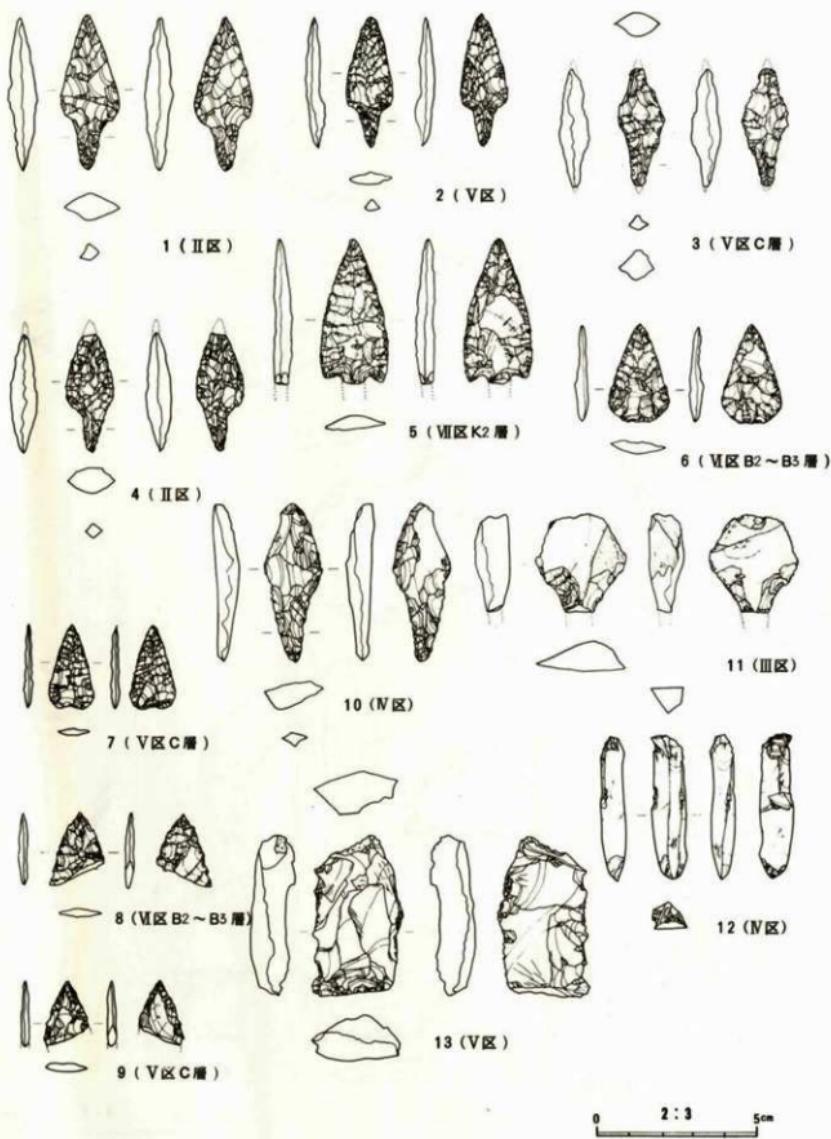
n、石皿（第47図78）

石皿は78の1点である。正面左上部に磨痕が認められる。板状の砂岩を利用したものである。

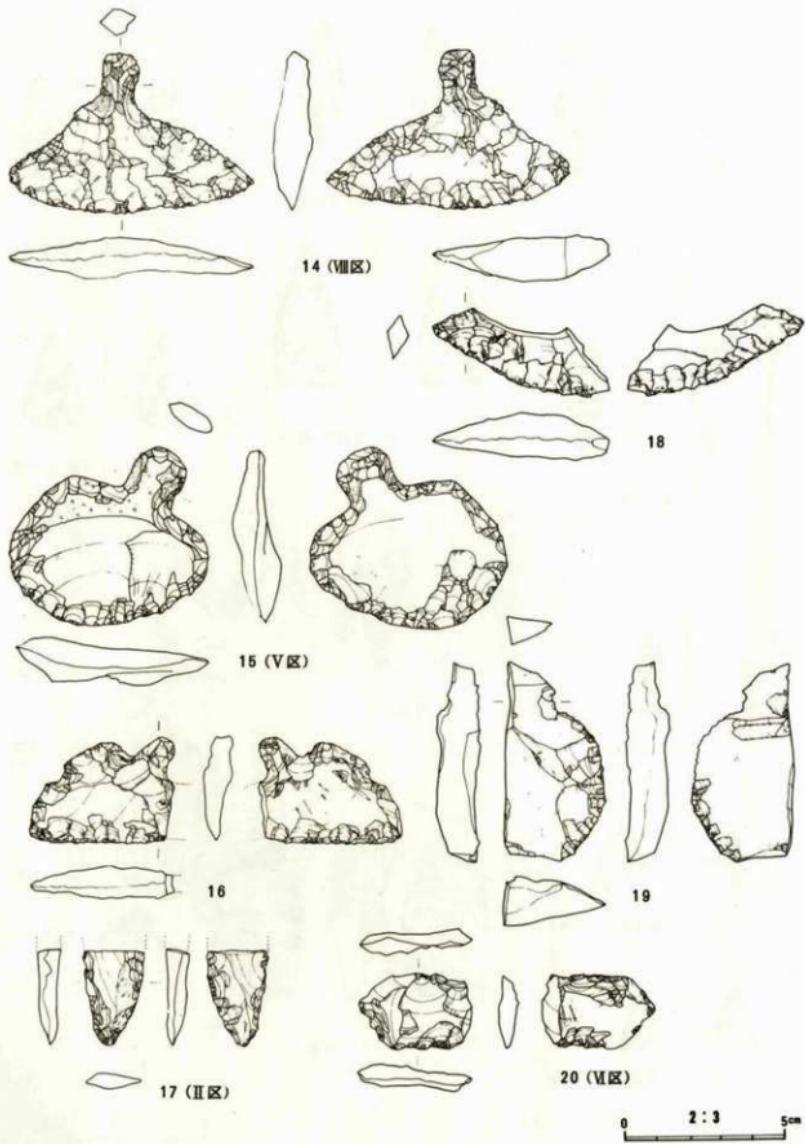
# 石器一覧表

( ) 内は欠損品の現存値

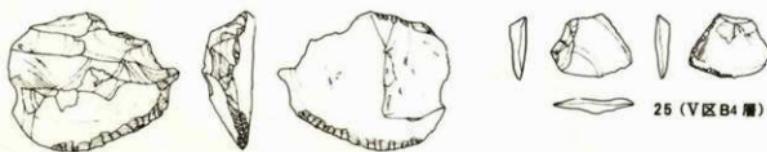
No.	器種	出土地	大きさ(cm)			重量(g)	石質	図版
			長さ	巾	厚さ			
1	石器	Ⅱ区	4.85	1.8	0.9	4.5	硬質、真岩	第38回
2	"	Ⅲ区	4.1	1.6	0.5	2.3	"	"
3	"	V区C層	(3.7)	1.4	0.9	(2.9)	"	"
4	"	Ⅲ区	(3.7)	1.5	0.8	(3.3)	"	"
5	"	Ⅲ区K2層	(4.5)	2.1	0.6	(4.7)	"	"
6	"	Ⅲ区K2層	3.1	1.9	0.4	1.8	"	"
7	"	V区C層	2.6	1.4	0.25	0.8	玉髓	"
8	"	Ⅲ区K2層	(2.0)	1.5	0.3	(0.7)	"	"
9	"	V区C層	(1.7)	1.3	0.3	(0.6)	硬質、真岩	"
10	石器	Ⅱ区	4.95	1.8	0.75	5.7	"	"
11	"	Ⅲ区	(3.1)	2.8	1.05	(1.8)	"	"
12	"	Ⅲ区	4.5	1.05	0.75	3.7	"	"
13	圓形石器	V区	4.9	2.7	1.25	20.7	"	"
14	石器	Ⅲ区	5.0	7.6	1.2	24.7	"	第39回
15	"	V区	5.2	6.2	0.6	33.8	"	"
16	"	"	3.2	(4.3)	0.9	(14.2)	"	"
17	"	Ⅱ区	(2.95)	(1.9)	(0.7)	(3.5)	"	"
18	"	"	(4.2)	(2.1)	(1.35)	(12.5)	"	"
19	刮器	-	3.2	4.3	0.9	22.3	"	"
20	"	Ⅲ区	6.2	3.2	1.4	4.7	珪岩	第40回
21	"	Ⅲ区C層	4.3	5.3	1.6	29.5	硬質、真岩	"
22	"	Ⅲ区	4.5	4.2	1.1	19.5	"	"
23	"	Ⅲ区K2~3層	3.3	3.8	1.4	21.2	"	"
24	"	Ⅲ区K4層	7.0	3.2	1.5	25.1	"	"
25	"	V区D4層	1.95	2.5	0.5	1.8	"	"
26	"	V区C層	1.9	1.5	0.3	0.7	"	"
27	"	V区D5層	1.2	2.1	0.4	0.7	"	"
28	"	V区K2~3層	5.1	3.35	1.2	15.2	"	"
29	"	V区K4層	4.3	6.5	1.6	35.4	"	第41回
30	"	X区	2.5	2.15	0.7	3.2	"	"
31	"	Ⅲ区K4層	3.5	6.5	1.8	26.1	泥岩(鉱質頁岩)	"
32	"	Ⅲ区A4層	3.4	4.0	1.85	20.0	玉髓	"
33	"	Ⅲ区K2層	5.3	2.9	1.55	16.8	玉質、真岩	"
34	"	Ⅲ区K2~3層	3.5	2.9	0.95	8.7	墨白石	"
35	"	Ⅲ区K2層	4.9	5.3	1.5	34.9	硬質、真岩	"
36	圓形石器	Ⅲ区K2層	5.3	2.9	1.55	15.9	"	第42回
37	"	V区K2層	4.8	2.65	1.55	16.5	"	"
38	"	V区K2~3層	5.55	3.7	1.25	22.4	"	"
39	"	Ⅱ区	4.6	3.25	1.4	18.5	泥岩	"
40	"	V区K2~3層	4.4	2.7	1.8	16.5	硬質、真岩	"
41	"	V区K2層	2.9	2.2	1.5	8.9	"	"
42	"	V区K2~3層	5.3	5.5	1.7	48.2	ホルンフェルス (板成岩)	第43回
43	"	V区C層	3.1	2.8	1.25	9.2	珪岩	"
44	"	Ⅲ区B1層	5.45	2.6	1.15	13.7	硬質、真岩	"
45	"	Ⅲ区	3.0	6.7	1.8	31.2	"	"
46	"	V区K2~3層	4.5	6.5	1.5	31.0	"	"
47	使用痕を有する片剝	V区B1層	4.3	3.3	1.4	16.7	"	第44回
48	"	V区B1層	2.8	2.1	0.9	3.4	"	"
49	"	Ⅲ区K2~3層	5.7	3.3	1.25	20.7	"	"
50	"	Ⅲ区B1層	5.3	3.7	1.1	16.1	珪岩	"
51	"	V区	7.3	5.4	1.4	66.2	硬質、真岩	"
52	"	V区K2層	3.8	1.9	0.6	3.2	"	"
53	"	V区K4層	3.5	2.4	0.45	3.0	"	"
54	"	V区C層	4.1	1.8	0.9	5.0	"	"
55	"	Ⅲ区K2~3層	3.45	2.6	1.2	10.3	珪岩	第45回
56	"	"	6.3	1.9	1.3	8.8	硬質、真岩	"
57	"	"	2.6	2.4	1.05	7.0	硬質、真岩	"
58	"	V区C層	2.2	2.5	0.65	2.9	"	"
59	"	V区K2層	4.6	6.7	0.9	24.4	珪岩	"
60	"	V区B1層	2.6	3.6	0.9	7.5	珪岩	"
61	"	V区K2~3層	2.8	3.6	0.7	6.5	珪岩	"
62	圓形石器	V区C層	2.8	1.7	1.0	4.5	"	"
63	石核	Ⅲ区C層	5.1	4.0	3.2	94.2	硬質、真岩	"
64	打製石斧	V区K2~3層	5.25	5.4	1.7	111.3	花崗閃綠岩	"
65	磨製石斧	Ⅲ区	(7.3)	4.65	2.5	(151.5)	花崗閃綠岩	"
66	"	Ⅲ区	6.3	3.3	1.1	34.3	"	"
67	石器	Ⅲ区C層	3.1	(3.15)	0.6	(8.8)	真岩	"
68	磨・凹・磨石	V区	9.3	7.2	4.2	477.0	花崗閃綠岩	"
69	磨・凹・磨石	V区	12.7	7.6	3.3	421.0	花崗閃綠岩	"
70	"	V区C層	10.3	(8.6)	6.25	(796.0)	花崗岩	"
71	磨石	V区C層	10.0	6.4	2.6	216.0	砂岩	"
72	"	V区	6.9	3.8	2.8	77.0	硬質、真岩	"
73	研石	Ⅲ区	(9.5)	(9.3)	(3.4)	(315.0)	珪質砂岩	"
74	"	Ⅲ区	(7.5)	(6.2)	2.65	(150.0)	珪質砂岩	"
75	磨石	V区C層	9.7	7.8	5.15	592.0	花崗閃綠岩	"
76	"	V区	11.9	8.0	4.7	741.0	"	"
77	凹・磨石	V区	9.9	8.6	4.3	560.0	"	"
78	石面	Ⅲ区B1層	26.4	18.4	4.3	2540.0	砂岩	"



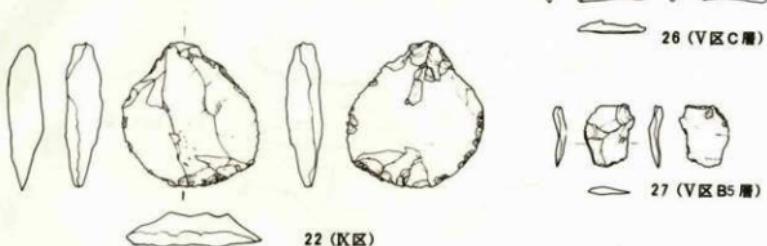
第38図 石器実測図（1）



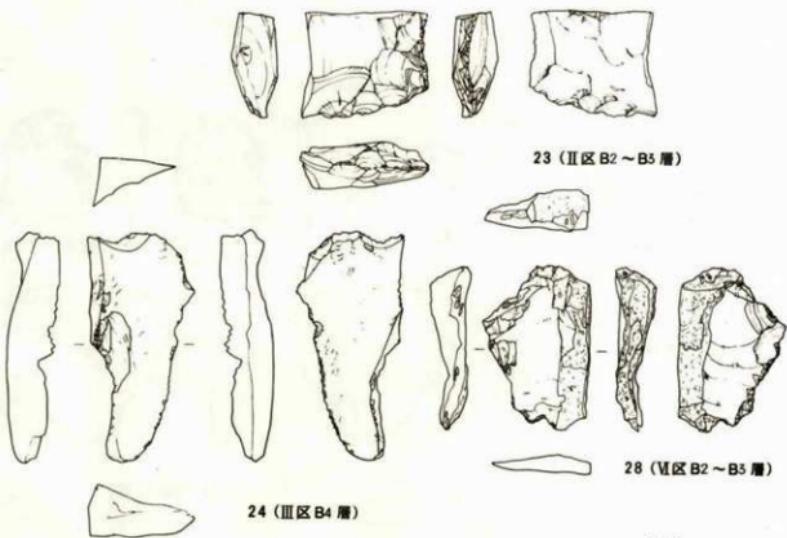
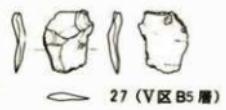
第39図 石器実測図（2）



21 (III区C層)

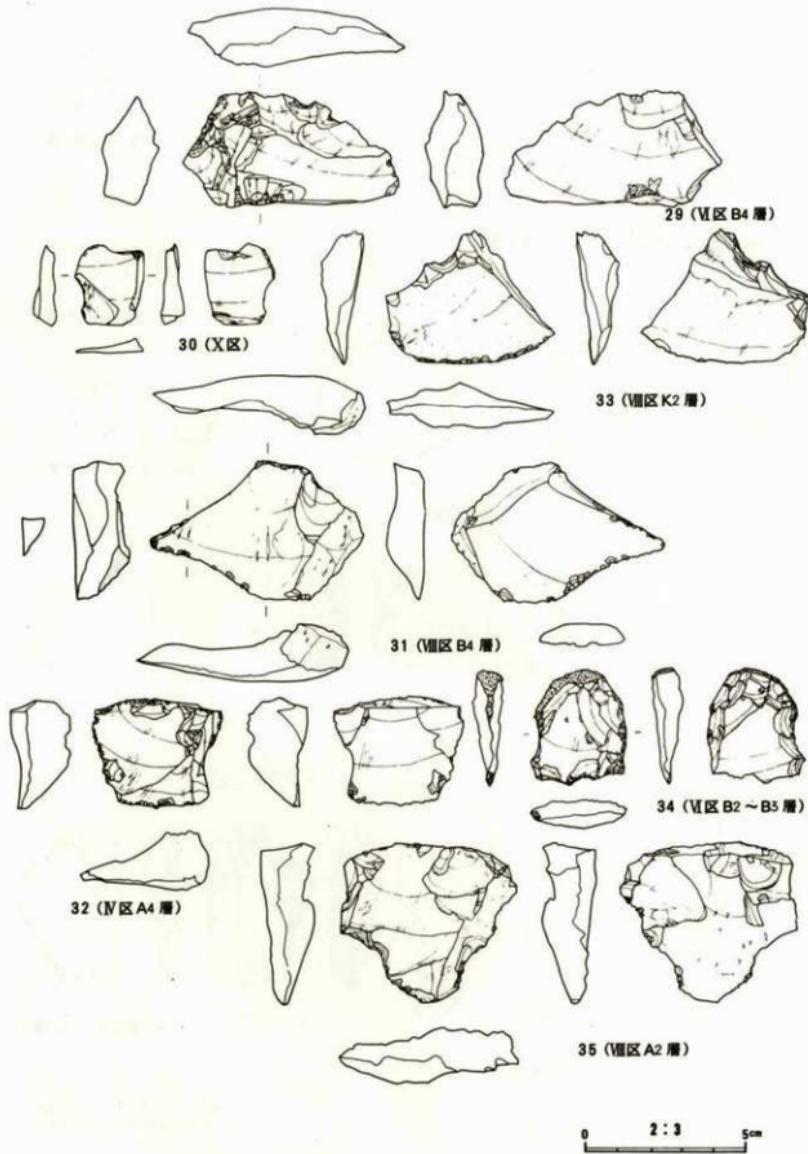


26 (V区C層)

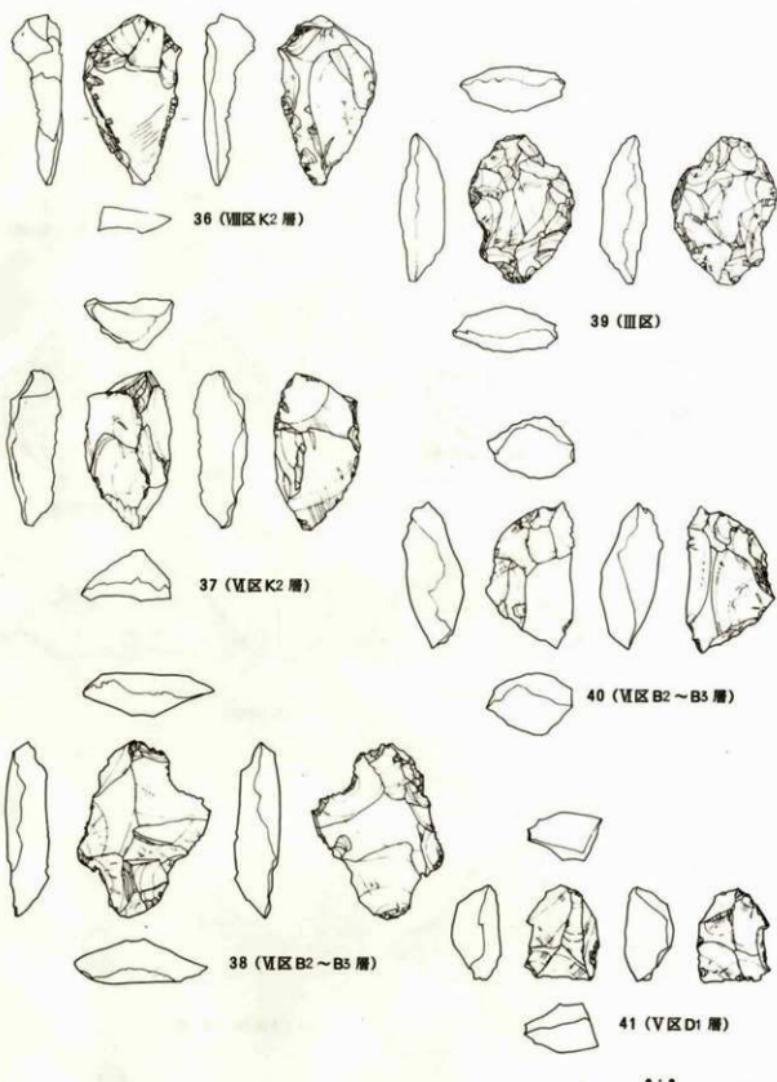


0 2:3 5cm

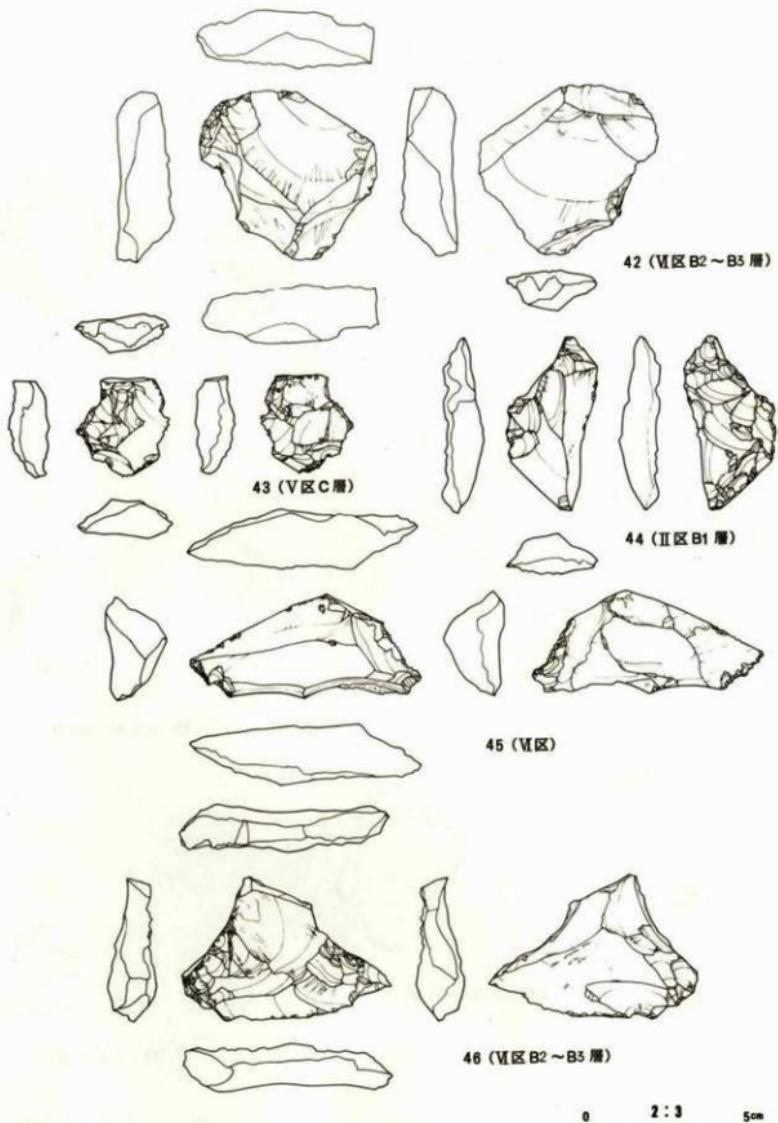
第40図 石器実測図 (3)



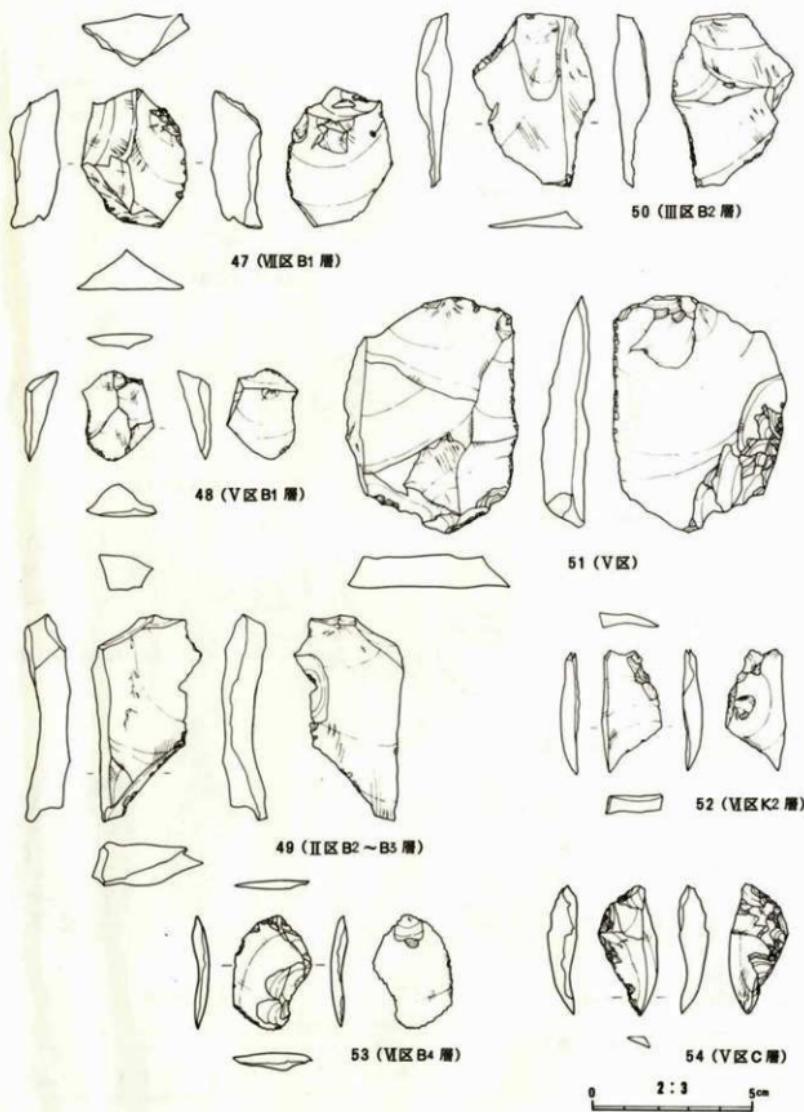
第41図 石器実測図 (4)



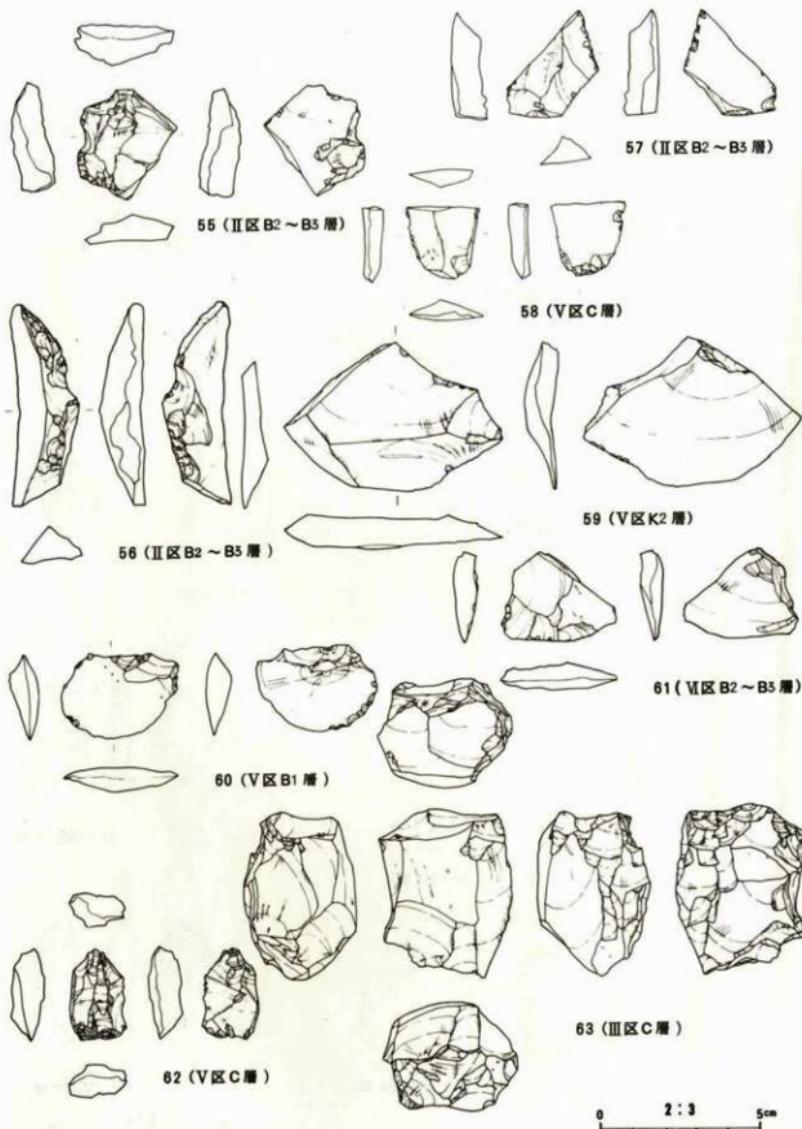
第42図 石器実測図 (5)



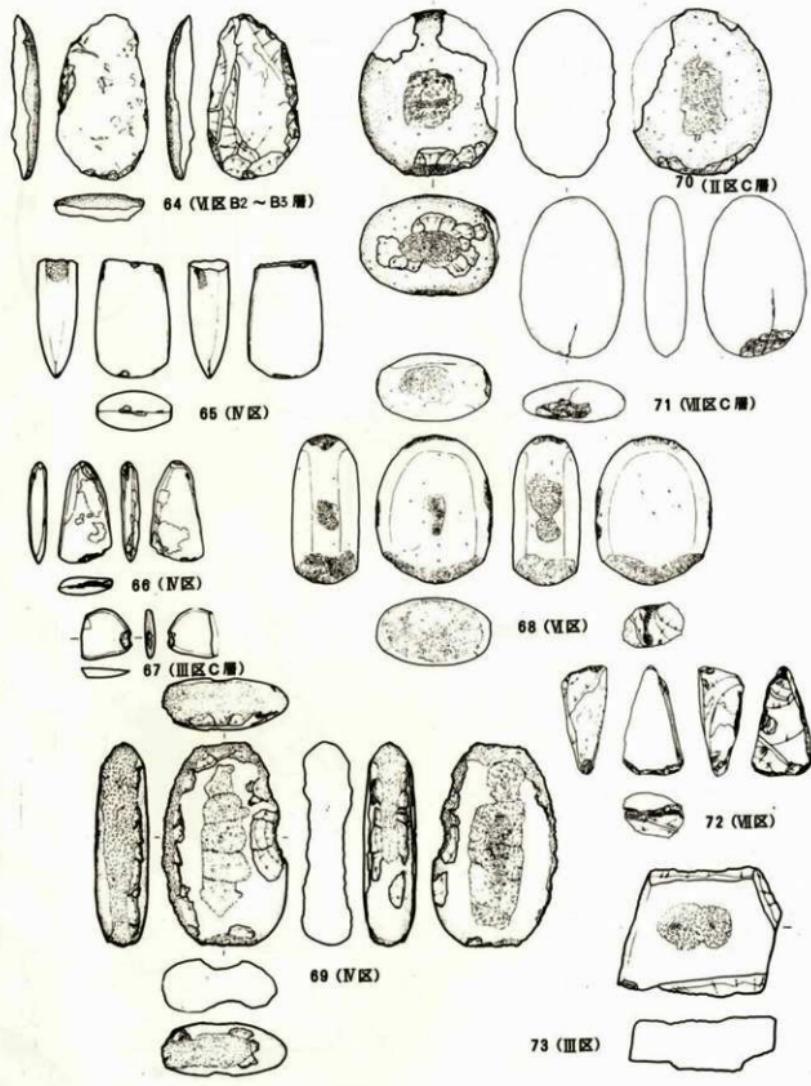
第43図 石器実測図 (6)



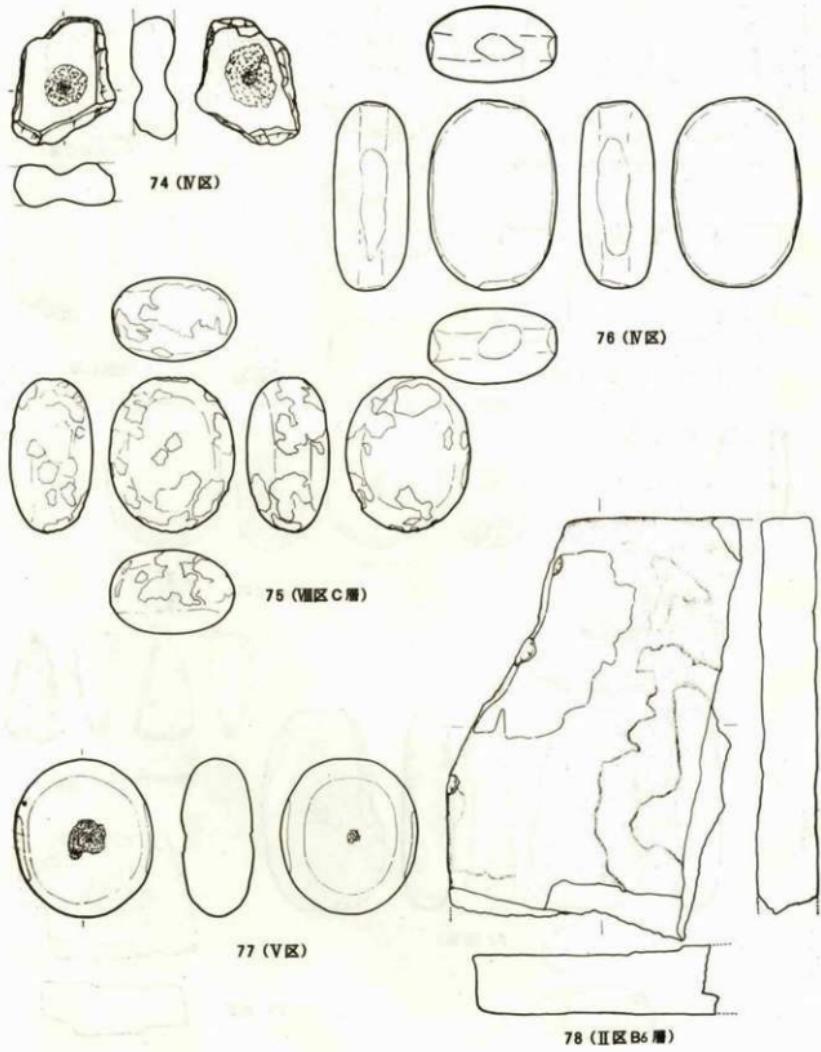
第44図 石器実測図 (7)



第45図 石器実測図 (8)



第46図 石器実測図 (9)



第47図 石器実測図 (10)

#### 第4節 石製品(第48図)

今回の調査によって本遺跡より出土した石製品は石剣・石棒類4点、岩版2点、円盤状石製品1点である。その全てを掲載し得た。以下触れていくたい。

##### a、石剣・石棒類(第48図1~4)

1~4はいずれも端部片である。1は断面楕円形で、端部は段を有し、太くなる。4も断面ほぼ楕円形を呈すると思われる、端部は斜めに成形されている。2は断面楕円形で両端部を欠損する。3は表面の剥落片である。1~2~4は表面がよく研磨されている。3は表面が風化磨耗している。2は石棒と思われるが他は石剣か石棒か判然としない。

##### b、岩版(第48図5・6)

5~6とも欠損品で、隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈するものと思われる。5は表面に断面V状の溝が交差する。表面はよく研磨され、擦痕が認められる。6は表面の剥落が著しいがよく研磨され、擦痕が認められる。裏面は剥落した部分にも擦痕が認められる。5~6とも表面が風化しているが朱が認められ、全面朱塗であったと思われる。

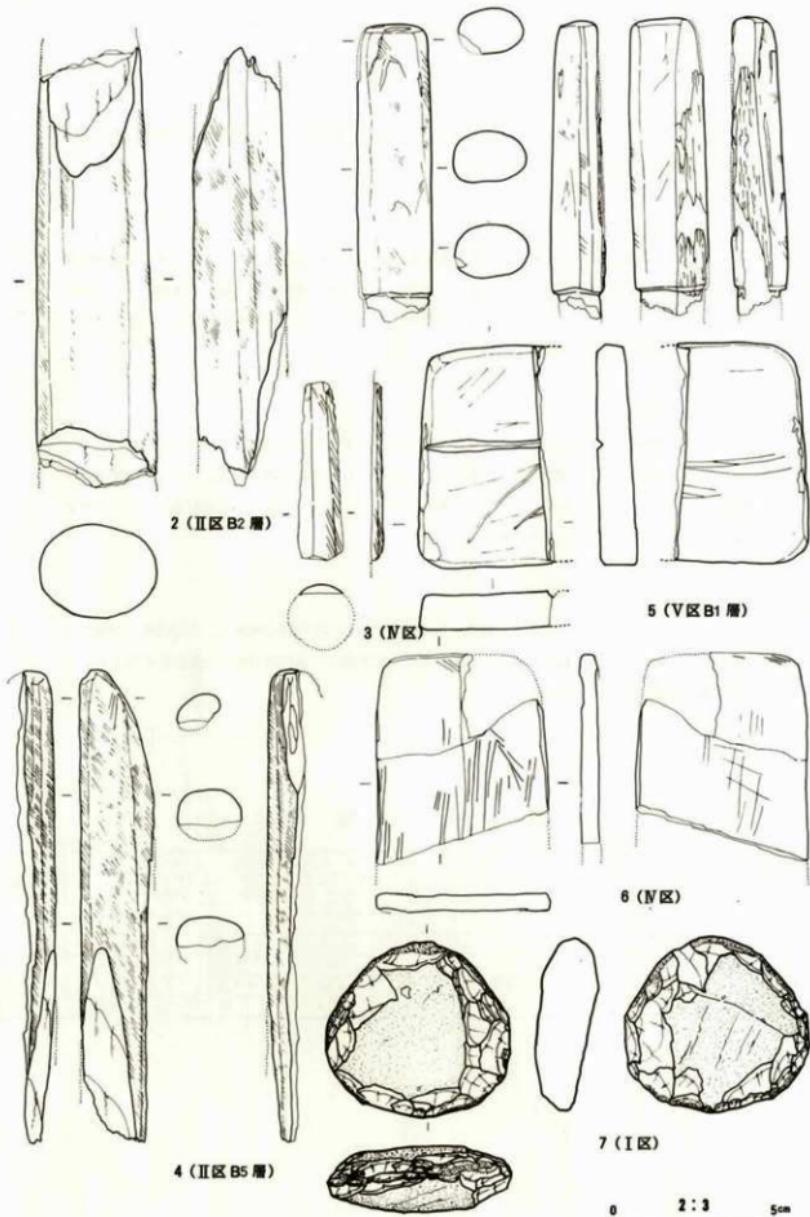
##### c、円盤状石器(第48図7)

円盤状石器は7の1点のみである。隅丸三角形を呈す。偏平な円錐を利用し、全周縁部に剥離がなされ、さらに部分的に敲打痕を有する。正面は大きく自然面を、裏面は自然面と節理面を残すが、いずれも磨痕が部分的に認められる。

石製品一覧表

( )内は欠損品の現存値

番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	國版
1	石剣・石棒	II区 82層	(9.3)	2.3	1.7	(59.3)	粘板岩	■
2	“	II区 82層	(13.7)	3.7	2.9	(179.9)	“	“
3	“	II区	(5.6)	(1.4)	(0.6)	(3.5)	“	“
4	“	II区 85層	(14.4)	2.3	1.1	(46.5)	“	“
5	岩版	V区 81層	(6.9)	4.2	1.15	(39.5)	凝灰質砂岩	“
6	“	II区	(6.3)	5.3	(0.55)	(17.7)	砂岩	“
7	円盤状石器	I区	5.5	5.75	1.8	75.2	粗粒砂岩	“



第48図 石製品実測図 (1)

## V まとめ

今回の調査は、道路災害復旧工事に伴う緊急発掘調査であり、調査地が道路法面上の狭い範囲であった。調査面積は斜面上で約120m<sup>2</sup>である。調査地内は、開田による削土や大雨災害による土砂流出等擾乱を受けているが、調査面積が小さいにもかかわらず多量の遺物が出土している。

以下に今回の調査の成果と問題点をまとめてみたい。

- 1、大芦遺跡は、夏井川左岸の標高130m～190mの南向きの段丘面に立地している。
- 2、今回の調査地付近は遺物包含層となっており、遺物の出土する層厚は表土下2～3mである。
- 3、大芦遺跡は、縄文時代晚期を主体とする集落跡である。
- 4、今回の調査では、縄文時代後期末葉から晚期中葉までの遺物（特に土器）が出土しているが、土器の型式は大洞B—C式期と大洞C1式期のものがその主体を占める。
- 5、出土土器の器種は晩期の遺跡に見られる一般的なものは全て出土している。量的には深鉢形のものが圧倒的に多く、次いで鉢形・壺形・台付鉢形となり注口土器が最少である。香炉形や筒形土器等やや特殊なものも出土している。
- 6、土製品は、中空・中実土偶の他に円環状土製品・土板・有孔及び無孔の円盤状土製品が出土している。
- 7、石器・石製品は晩期の遺跡に見られる一般的なものが出土しており、この中では岩板が注目される。
- 8、これらの出土遺物はB層を中心としており、この層の中にある焼土堆積層の周辺に注口土器や土製品等が比較的多く出土する傾向が見られる。
- 9、今回の調査地付近はその出土遺物の量から、大芦遺跡内の廃棄の場所と考えられる。このことは、遺跡内においてこの場所が特殊な位置（その利用形態が）を占めることが想定される。
- 10、今回の調査では住居址等の遺跡は確認されなかったが、出土した多量の遺物に伴う遺構が周辺に存在することが予想される。
- 11、今回の調査で改めて本遺跡が当地方の縄文時代晩期の様相を解明する上で貴重な遺跡であることを認識した。

最後に、今回の調査に用具置場等を提供して下さった夏井熊太郎氏、また、積極的に調査に協力してくれた久慈中学校科学クラブの諸君に文末ではあるが、感謝の意を表するものである。

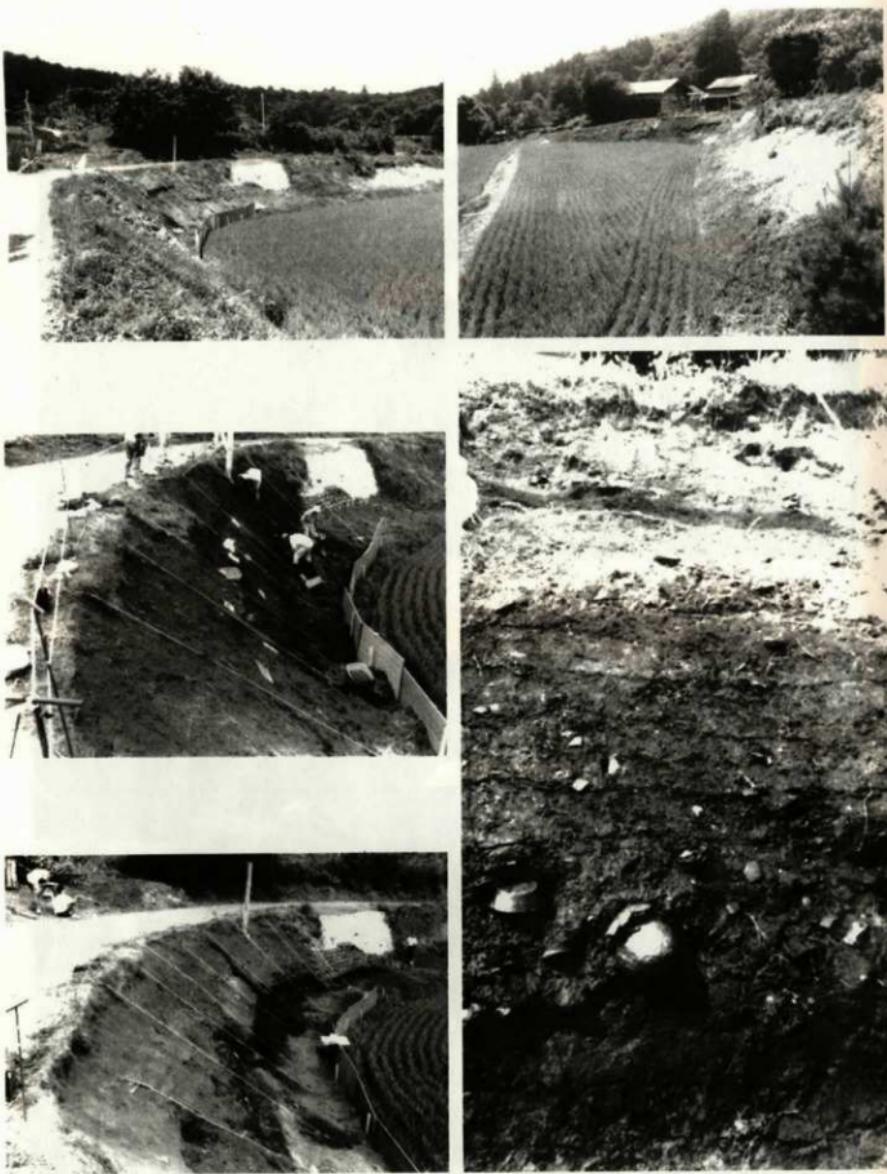
## 参 考 文 献

本稿のための引用・参考文献は次のとおりである。

- 石野公一 1976 北上山系開発地域土地分類基本調査—久慈一 岩手県企画開発室
- 照井一明 1982 陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系 岩手県高等学校教育研究会地理部会
- 加藤晋平他編 1981 「縄文土器Ⅱ」 「縄文文化の研究」第4巻 雄山閣
- 加藤晋平他編 1983 「縄文土器Ⅲ」 「縄文文化の研究」第5巻 雄山閣
- 金子裕之編 1982 「縄文時代Ⅲ」 「日本の美術」 191 至文堂
- 熊谷常正他編 1982 「岩手の土器」 岩手県立博物館
- 相原康二 1980 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書M」 岩手県文化財調査報告書第55集 岩手県教育委員会
- 藤村東男他 1979 「九年橋遺跡第5次調査報告書」 北上市教育委員会
- 藤村東男他 1980 「九年橋遺跡第6次調査報告書」 北上市教育委員会
- 中村良幸 1979 「小田遺跡発掘調査報告書」 大迫町教育委員会
- 小田野哲恵 1969 「岩手県蔚前台遺跡出土の晩期縄文土器について」 「進光器」2号 みちのく考古学研究会
- 鈴木孝志 1964 「岩手県九戸郡板橋遺跡」 「日本考古学年報」12号 日本考古学協会
- 鈴木克彦 1980 「特集・亀ヶ岡文化」 「考古風土記」第5号
- 鈴木克彦 1981 「特集・亀ヶ岡文化Ⅱ」 「考古風土記」第6号
- 藤村東男 1984 「縄文土器の知識Ⅱ 中・後・晚期」 東京美術
- 高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究—青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について—」 「北奥古代文化」第12号 北奥古代文化研究会
- 面代民義 1984 「上野山(II)遺跡発掘調査報告書」 久慈市埋蔵文化財調査報告書第4集 久慈市教育委員会
- 加藤晋平他編 1980 「石器の基礎知識Ⅰ」・「石器の基礎知識Ⅱ」 柏書房
- 鈴木道之助 1981 「石器の基礎知識Ⅲ」 柏書房



図版 1 大芦遺跡近景



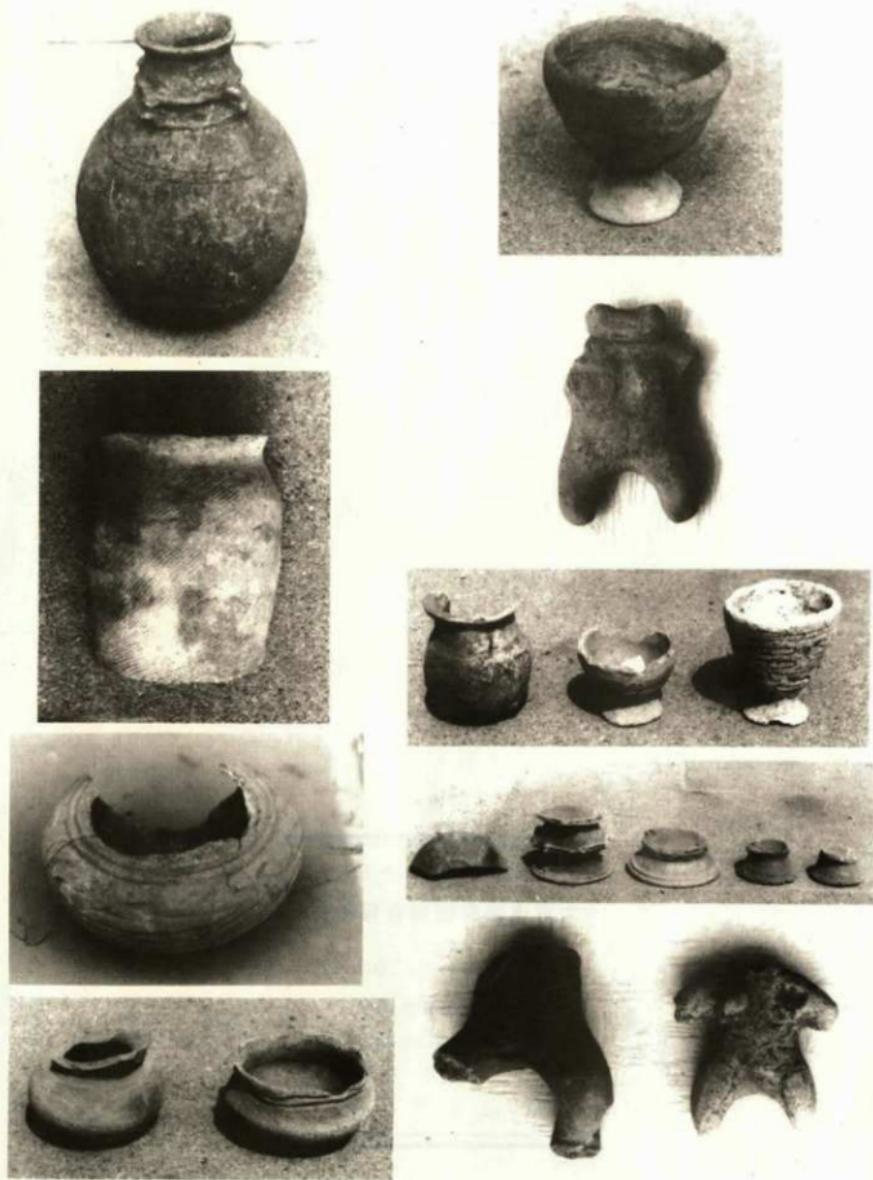
図版2 作業風景・土層堆積状況



図版3 遺物出土状況（1）



図版4 遺物出土状況（2）



図版5 参考資料、調査以前の出土遺物

---

---

久慈市埋蔵文化財報告書 第5集  
大芦遺跡発掘調査報告書

昭和60年3月31日発行

発行 久慈市教育委員会

〒032 岩手県久慈市川崎町 3-8-1  
TEL (0194) 52-2111

印刷とだて印刷

---

---



## 図版修正箇所一覧表

頁	図版番号	修 正 内 容
P 5	第 4 図	I区 125の位置(・)が左に寄る。 III区 34が33になる。
"	"	IV区 86の位置(・)が上(線上)に寄る。 IV区 114が116になる。
"	"	V区 21を消す。 V区 23が21になる。
"	"	VI区 21が23になる。
P 23	第 5 図	4の層位を(V区B6層)に訂正 タイトルの深鉢型-1を深鉢形-1に訂正
P 24	第 6 図	10の層位を(V区B5層)に訂正 12の層位を(V区K2層)に訂正 下から2段右の図右下に22(V区)を入れる。 番下、左の図下に21(V区B2層)を入れる。 番下、右の図下に23(V区B2層)を入れる。 タイトルの深鉢型-2を深鉢形-2に訂正
P 25	第 7 図	タイトルの鉢型-1を鉢形-1に訂正
P 26	第 8 図	タイトルの鉢型-2を鉢形-2に訂正
"	"	46の層位を(V区B2層)に訂正 55の層位を(V区A3層)に訂正
P 27	第 9 図	右上の図の番号と層位を62(V区B4層)に訂正 83の層位を(III区)に訂正 タイトルの台付鉢型、台・脚部-1を台付鉢形、台・脚部-1に訂正
P 28	第 10 図	85の層位を(III区B6層)に訂正 86の層位を(V区B6層)に訂正
P 29	第 11 図	タイトルの壺型-1を壺形-1に訂正
P 30	第 12 図	タイトルの壺型-2を壺形-2に訂正
P 31	第 13 図	タイトルの壺-3を壺形-3に訂正
P 33	第 15 図	130と131との番号を交換する。 133の層位を(II区B3層)に訂正
P 34	第 16 図	153の層位を(V区)と入れる。
P 65	第 38 図	5の層位を(V区B4層)に訂正
P 68	第 41 図	33の層位を(V区B4層)に訂正
P 69	第 42 図	36の層位を(V区B4層)に訂正
P 76	第 48 図	右上の図下に1(V区B2層)と入れる。

大芦遺跡発掘調査報告書（本文正誤表）

頁	行	誤	正
P 8	上 1	シルト質ではぼ <u>      </u> 層と同様	シルト質ではぼ <u>B5</u> 層と同様
"	上 5	黒色土 <u>      </u> 層とほぼ同様	黒色土 <u>D1</u> 層とほぼ同様
P 9	下 10	底部外面はヘラミガキ <u>である</u>	底部外面はヘラミガキ <u>が多い</u>
"	下 2	第5図 <u>1～3</u> 、第6図 <u>4</u>	第5図 <u>1～4</u>
P 10	上 19	第5図 <u>10</u>	第6図 <u>10</u>
"	上 22	第5図 <u>10</u>	第 <u>6</u> 図 <u>10</u>
P 11	下 11	第5図 <u>9～6</u> 図 <u>20</u>	第5図 <u>9</u> 、第6図 <u>11～20</u>
P 12	上 2	第26図 <u>111～23</u> 図 <u>283</u>	第26図 <u>111～33</u> 図 <u>283</u>
P 13	上 12	第29図 <u>188～204</u>	第29図 <u>188～30</u> 図 <u>204</u>
P 14	下 2	第 <u>3</u> 類	第 <u>5</u> 類
P 16	上 8	第9図 <u>65～84</u>	第9図 <u>66～106</u> 図 <u>84</u>
"	下 8	第34図 <u>299・305～307～309</u>	第34図 <u>299・305・307～309</u>
P 18	上 14	第13図 <u>105・106</u>	第13図 <u>106・107</u>
"	下 14	第35図 <u>320～36</u> 図 <u>331</u>	第35図 <u>320～36</u> 図 <u>330・331</u>
P 19	上 9	第36図 <u>334</u>	第36図 <u>333</u>
P 55	上 9	第 <u>17</u> 図 <u>1～5</u>	第 <u>37</u> 図 <u>1～5</u>
P 56	上 1	第 <u>17</u> 図 <u>6</u>	第 <u>37</u> 図 <u>6</u>
"	上 9	(第 <u>7</u> 図 <u>27</u> )	(第 <u>7</u> 図 <u>28</u> )
"	上 11	第 <u>17</u> 図 <u>7</u>	第 <u>37</u> 図 <u>7</u>
"	上 17	第 <u>17</u> 図 <u>8～11</u>	第 <u>37</u> 図 <u>8～11</u>
"	下 4	第 <u>17</u> 図 <u>12</u>	第 <u>37</u> 図 <u>12</u>
P 63	下 13	第47図 <u>68～77</u>	第46図 <u>68～47</u> 図 <u>77</u>
P 77	下 6	遺跡	遺構

実測土器一覧表 正誤表 (P58~P61)

番号	出土位置 誤	出土位置 正
23	VII区B2層	VII区B2層
46	IV区B1層	IV区B2層
54	VII区	III区B4層
62	VII区B6層	VII区B4層
63	VII区B5層	VII区B4層
85	III区B5層	III区B6層
86	IV区B5層	IV区B6層
102	VII区A2層	VII区A1層
133	II区B2層	II区B3層

土製品一覧表 正誤表 (P63)

番号	出土位置 誤 図版	出土位置 正 図版
1	表採	第17図-1
2	表採	—
8	IV区表土	IV区
10	V区表土	V区
12	VII区表土	VII区

石器一覧表 正誤表 (P64)

番号	出土位置 誤	出土位置 正
5	VII区K2層	VII区B4層
33	VII区K2層	VII区B4層
36	VII区K2層	VII区B4層

35 35 21 21 116 116 25 25

3 (IV区B6層) 3 (IV区B6層) 10 (IV区B5層) 10 (IV区B5層) 12 (VI区K2層)

21 (V区B2層) 22 (V区) 23 (VII区B2層) 46 (IV区B2層) 55 (IV区A3層)

62 (VII区B4層) 83 (III区) 85 (III区B6層) 86 (IV区B6層) 130 ((I区))

133 (II区B5層) 153 (V区) 1 (IV区B2層)

4 (VII区B6層) 131 (VII区B4層) 5 (VII区B4層) 36 (VII区B4層) 33 (VII区B4層)

102 (VII区A1層) 54 (III区B4層) 63 (VII区B4層)

臺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺

鉢 鉢 鉢 鉢 鉢 鉢 鉢 鉢 鉢 鉢

形 形 形 形 形 形 形 形 形 形